
秋へ、秋へ、秋へ……

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋へ、秋へ、秋へ……

【Nコード】

N35100

【作者名】

はまな

【あらすじ】

秋から逃げる少年は、海岸で同じく秋を嫌い逃亡する少女と出会った。それぞれ季節に弄ばれ、痛めつけられた二人は、共に暮らし始める。少年は尽きることはない問いを抱え、少女は秘密と微笑を持っていた。少女の存在に、やがて少年は変質していく。

それが、最後の彼であり彼女であった。少女は、数多くの秋を経て、最後の秋に望む。恋は既に指すべき相手を失い、時間の中を彷徨い続ける。

平坦な人生の陥穽に落ち込んだ少年と、嵐のような時空戦争の中を生きる少女の秋の物語。

前編 秋への階段 1 2

前編・秋への階段

1

黒く長い髪が、黄昏時の陰鬱な薄い色に染められていた。宙を舞って、美しく振り乱される。

少女が宙に浮いたまま尋常ならざる速度で移動した。搔き消えるように姿が無くなり、次瞬には肉薄している。

賢く、しかし同時にすねた感のある黒猫といった印象が強い。長い髪は先端に近い部分でゆるく癖がついており、つり気味の目の形とあわせて一層猫らしさを醸し出している。小柄で細身。華奢と言っている。

その少女に、熱が迫った。空間に線引きされた運動吸収分子体が周囲に存在する分子のエネルギーを収束させ、一気に爆発的な熱量を正確な方向性とあわせて送り出す。

空中に輝く線が無数に走った。導かれた熱線が、四方八方から少女を貫きにかかる。

そのほとんどを、少女は何も無い空を蹴ってかわし、時に視線を向けて霧散させる。甲高い音が響き、いくつもの熱線が少女に触れられずに弾けて消える。

足を動かし地を蹴ることなく、少女は黄昏の暗さの中を縦横無尽に飛んだ。右腕には一人の少年が抱えられていた。ぴくりとも動かない、力の入っていないと一目で分かる人体が、彼女の動きに合わせて揺れる。腹の部分に大きな傷があり、ぼたぼたと何かがこぼれていく。

少女の顔は、涙で酷く汚れていた。その上、沸騰させ滾らせた殺意が充溢し、息も忘れるほどの迫力に彩られている。

花の香りが、少女の周囲に広がった。懐かしい香りだった。無数の花卉が彼女を襲い、ずたぼろになるまで切り刻んだ。たまらず地に落ちた少女の腕から、少年が放り出された。それを、何か奇怪なシルエットを持つ影が掴み奪っていく。

少女が絶叫した。喉が破れ、血が咳と共に吐き出された。背中を地面に叩きつけられ、体の内部でひどく不気味な音が響いた。

立ち上がる間もなく、いくつも赤い、葉のない花が矢のように細い体に突き刺さった。小さく呻いたその声を掻き消すように轟音がとどろいた。花が爆発四散し、少女の体が穴だらけになる。

怒りが、壊れた喉からほとばしった。だが、すぐに熱が波のように襲い掛かり、炎に包まれた。焼け焦げて、声も出なくなる。

ちくしょう……

失意が、悔しさが、焰よりも強く彼女を傷つけた。

覚悟は、すぐに決めねばならなかった。敵は更に増え、きらきらと輝く銀の光が降り注ぎ始めている。

彼女は目を閉じた。涙もすぐに熱が奪い去っていく中で、その意識は、瞼の裏ではなく別の物を見つめていた。

秋へ。

哀しく虚しく苦痛に満ちた、秋へ、秋へ、秋へ……

2

朝倉秋人は香りにも、色にも、味にも肌触りにも耳に飛び込む振動にも或いはそれ以外の何かにも——深く感じ入っていた。

秋が、彼に迫っていた。暑さが通り過ぎた後に訪れるそれは、彼を無遠慮に愛撫し、皮膚の下にまで入り込む。秋が、秋に付随するすべてが、彼の感覚を刺激し、彼に浸透する。

夏も冬も春も彼にとっては特になんでもないような季節だ。秋を除けば、彼は季節という物への興味を失って久しい。桜の蜜にも雪についた土汚れにも湿気た花火にも何ら特別な感情は無い。揺さぶ

られることは無いのだ。

だが、こと秋の話になると、そういうことは一変してしまう。始まりはいつのことだったか——彼自身曖昧にしか覚えていないことだが。

過去の出来事が、感覚の質を変えするという事は、彼にとっての常識となっている。朝倉は、何年か前からずっと、自分にとっての秋が完全に変貌してしまったことを自覚している。

予兆は、朝氣がつく。昨日までと違う色、違う香りや手触りなどが広がっているのだ。実際には、寝起きしている自宅のベッドにも、通学路の風景にも変わりはない。昨日と地続きの緩やかな世界が広がっているだけだ。

しかし、感じ方が変われば世界は変わってしまう。昨日までを置き去りにして彼の感覚は秋を捉えだす。

ぎらつくほどの秋の実感。恐らく誰もが感じていないような微細な部分にまで明確な「秋」を感じ取り、また、感じ入ってしまう。どんなことよりもリアルに、彼を支配する。

実感など、所詮は一人称的な体感であり、足元のおぼつかない儂い主観経験ではないか。そう考えてみるのが朝倉には多くあるのだが、しかしそんな考えを実感の確かさは吹き飛ばしてしまうのだ、いとも簡単に。

自分は確かに秋を感じている。深く細かく最大限。人にとっての日本の秋を最大限体感している。それは絶対である。

その感覚は彼を大いに苦しめていた。彼は秋に耐えられなくなってきた。

例えば、海だ。

朝倉は、街の寂れた海岸線をなぞるようにゆつくりと歩いていた。街の唯一の海岸。街と言っても、市の中心は離れた場所にある。普段人が寄り付かない、漁港でもビーチでも観光名所でもないただの海岸。放置された、コンクリートで固められた色気の無い海岸。

朝倉は、強い風に少しの間目を閉じた。線の細い顔身体をしており、やや長めの髪や女性らしさの含まれた顔のパーツは、総じて大人しいような、感情を読み取りづらいような、不思議な容姿を形作っている。楽器でも持って物憂げな顔で座っていれば、それなりに様になりそうな少年である。

風が止み、歩みが再会される。

所々海に向かって手を差し伸べるかのようにコンクリートの足場が突き出ている。暇な釣り人が、どうしても独りになりたければこの場所を利用することもあるかもしれない。そんな場所だった。

幾分真夏よりも早く到来する夕刻の気配が押し寄せ、夕闇と混ざった半端な夕日の色が辺りを照らしている。

潮の匂いは、この季節にあっては珍しく朝倉が秋を感じないものの一つだった。淡白な自然の香り。嗅覚の一部だけでも秋から逃れることの出来る、逃げ場だった。

だがその香り以外の全て――夕日の照り返しが恨めしげに光る海面やその揺らぎ、時折陸の方から吹く風、ひび割れたコンクリの隙間から顔をのぞかせている草花、その間を漂う昆虫達……それらは全て秋の一部だ。

特に、水平線まで広がる海の景色は駄目だった。言い様の無い、哀しみとも諦めとも救いともつかない何かの感覚が、背骨の前辺りから広がって体を侵す。

（逃げたい）

秋から、秋を感じる場所から。家を出て、逃げ続けたい。自宅は最も秋を感じる場所だった。それも、自宅に限ればそこは一年中秋しか感じられない。時間の止まった場所だ。

その願いをかなえる術を、彼は持ち合わせてはいなかった。彼は一介の高校生に過ぎず、収入がさほどあるわけではない。家を出て、どこかに住んで、独りで生きていく自らを想像することも難しかった。

せいぜい、さびれた海岸まで歩いてくることくらいしか出来るこ

とはない。その事実が、景色をより一層苦害に満ちたものにしていく。

脱力して、腰を下ろす。波の打ち寄せる、舗装された断崖に設けられた数段の段差の一つに腰掛け、じっと空と海の境界を見つめる。苦痛の巡る土地。秋ある限り、逃れられはしない。

目を閉じ、潮の香りだけに集中する。幾分和らいだ秋の中で、いつしか彼は眠りに落ちていた。

愛してるわ、ばいばい。

五年前の姉の声が、玄関に小気味良く響いた。愛らしい顔立ちをした高校生の姉は、何処に行っても評判のいい容姿をしている。朝倉にとってはやや恥ずかしく、内心では誇らしい姉だった。

ころころとした影の無い笑顔が階段から降りてきた彼に向けられていた。姉はよく冗談で、愛してる、と言う。ここぞと言うタイミングで、父や母や担任の教師や近所の本屋の店主や弟に、よどみの無い発音で、愛してる、と。

父と母が、その姉の両脇でそれぞれ靴をはきながら笑った。もう秋人も中学生だ、そういう冗談は止めなさい、と父が言葉と裏腹に面白そうに言う。母は苦笑し、それに同調する。

仲のいい家族四人。その内彼——朝倉秋人を除いた三人は、皆靴を履き終え、出かける準備を全て整え終わった。彼だけは、その日の外出には付き合わなかった。数日前から体調が芳しくなかったのだ。

なにか美味しいもの買ってきたげるよ、と姉は付け加え、玄関を飛び出す。

大人しくしてなさいね、と母が釘を刺し、外へ。

一人だけのろのろとしていた父が、待ってくれよと慌てて二人を追う。

硬い音がして、玄関のドアが閉じる。静かな室内に、外を歩く姉の声が小さく聞こえてくる。少ししてそれも無くなり、昼間の静け

さが満ちた。

三人で出かけて、彼は留守番だった。彼はしばし居間で読書にふけり、その内ソファの上で眠ってしまった。

愛してるわ、ばいばい。

その言葉を残した姉は両親と共にその日、見事に心中を成し遂げて、彼は電話の音で起こされることになった。

五年前の秋の話だった。

歌声で、目が覚めた。

波の音の間に切れ切れに聞こえてくる。透明な声が高く上がり、伸びて、次の音へと繋がっていく。

聞き覚えのある歌だった。英語の歌詞、それが、切なく伸びて、苛烈に消える。繰り返され、折り重なる。

「限り無い……」

歌のタイトル。呟いた言葉は半分掠れて消えた。

朝倉は、英語が得意ではなかったが、その歌が何を謳っているかわかっていた。自宅に、何年も前から置かれているプレーヤーとCDの山。その中の一枚に、それは収録されている。

（親父のお気に入り）

持ち主が消えて自由になった家の物品で、彼が最初に目をつけたCD。今では、彼自身も何度と無く聴いた洋楽の有名な一曲。

持ち帰れ、と繰り返し、「返して欲しい」と終わる。

歌が終わって、気がつく。歌の最中だけは、彼は秋を感じていなかった。

ゆっくりと身を起こす。すっかり暗くなってしまった海岸は、ころうじて背後の街の明かりによって真っ暗闇から逃れている。

すぐ近くに、人の気配を感じた。柔らかな何かのイメージが、理由無く彼を安心させた。

段差を降りた先、海面ぎりぎりのところに、小さな影が見えた。まるで朝倉のその視線を待っていたかのように影は振り返って視線

を送り返してきた。

「ハロー、お目覚め？」

それは、一人の少女だった。

「————」

強烈な既視感^{デジャ・ヴ}が広がった。

喉の奥が詰まったように感じる。海をバックにした少女は、どこか猫を思わせる。腰の上辺りまで伸びた長い髪が、先端近くでゆるく弧を描いている。年の頃は、朝倉とそう変わらないように見えた。黒とグレーが所々で重なったワンピースが、肩から伸びるすらりとした右腕を隠しすぎず出しすぎずちょうど良く強調している。反対側は、短い袖だけがぱたぱたと揺れ、その中からは何も生えていない。

——隻腕の少女。

見ているもの、聞こえているものすべてが、ほんのひと時の間奇妙な感覚に塗りつぶされた。安堵のような、不安のような——一切合財全ての現実を圧倒する何かの去来。

そのせいで、しばらくの間彼は少女と見つめあうことになった。

少女は朝倉の驚きを含んだ視線を少しも動じず受け止め続けている。口元には薄く笑みが浮かんでいたが、顔全体としてみれば、それは皮肉さと諦めとをミックスした、渴きを感じる微笑である。

しばらくしてから、我に帰って彼は顔をそらした。

（なんだ？）

一瞬前に味わった感覚に、動揺していた。もっともらしい説明が一つも浮かんでこない。一体、何が、どういう意味の感覚を喚起したのか——。

綺麗な少女だった。少しでも小柄で、弱い夜の明かりを反射する瞳が特に美しい。

何と無しに気恥ずかしさを感じて、立ち上がった。

「僕は……眠ってしまったのか」

今更に自覚して、呟く。

「ええ」

「君は……？」

つい、そう口から出して、少し失礼だったか、と朝倉はすぐにそう思った。寝起きの頭に、唐突な出会いと、身を包むおかしな感覚が混乱を招いているのかもしれない。なかった。

少女が、彼に一步近づいた。段差を一つ昇って、一步分だけ声が近くなる。

「私は、――カナ。香名よ」

聞いたことの無い名前だった。同年代の友人や知り合いにも、それ以外にも、カナという名前には覚えが無い。

にもかかわらず、やはりその見た目や雰囲気同様、喉の詰まる、特別な何かを感じる。

（特別な何か、だって？）

自分で自分の思いつきに、苦笑する。彼は軽く頭を振った。

一目惚れだとか、運命の出会いであるとかいったものを連想するには、その感覚は少し違うものであったし、そも朝倉はそんな恥ずかしい夢想が素直に出来る人間でもなかった。

（一体、なんだろうか）

疑問だけが膨らむ。だが、続けてかけられた少女――香名の言葉に一時的にそれは掻き消えた。

「はじめまして」

奇妙なほどにストレートな挨拶である。瑞々しい、歌の時も感じた透明な声でそう言われる。

「……さっきの歌、ええと、君が？」

小さく頷かれる。香名は短く、歌の最初の部分を少しだけ風に乘せた。

「上手くは、歌えないんだけど」

恥ずかしがっているのだろうか、初めて彼から視線を外して僅かに俯いた。

「いや、上手かったよ」

もう少し、それこそ上手い言いようがあるようにも思ったが、彼はそう率直に述べた。

くすりと笑って、香名は軽い足取りで段を上った。すぐに朝倉のいる高さに上がって、隣――控えめな距離を置いた隣に、座った。

「少し疲れちゃった」

ふっと息をついて彼女は背伸びしてみせた。

何時位だろうか。だんだんと頭がはつきりし、朝倉は気になって腕時計を確かめた。既に七時を回っている。夜になって辺りがより静かになったせいか、海の立てる音が大きく聞こえる。

「もうこんな時間か……一体どれだけ――」

眠ってしまったのか。屋外で長時間のごろ寝など、そうそうあることではない。

「割に長い時間眠ってたみたいね。私がここに来てから、三十分以上経つけれど」

「その間ずっと?」

「ぐっすり」

自然と溜息がこぼれた。よくよく考えずとも、恥ずかしいところを見られたということくらい彼にも分かっていた。

「何でこんなところに?」

誤魔化すためか、そう問いかけている。

香名と名乗った少女は、少しだけ逡巡したようだった。海を見つめたまま黙考し、そして感情を殺したように平坦に答えた。

「秋から、逃げてきたの」

「秋……から?」

思いがけず少女が言い放った理由のもつ、奇妙な偶然性に、朝倉はつい鸚鵡返しにそう口にした。

「そう。ずっと続く季節から。耐え難い季節から。そこにいられなくなった季節から」

芝居がかった調子で言ってから、付け加える。

「秋って、好きじゃないから」

小さな声だったが、不思議と周りの雑音とは混じらず、クリアに朝倉の元に届いてくる。起きて、その姿を認めたときから香名というその少女は、朝倉に大きな存在感を感じさせている。

「……僕もだ」

意識せず、ただ自然に。それは、堪えることを意識しなかったために零れ出た言葉だった。そういう意味では涙と似ていたかもしれない。

短く、他人からは意味が読み取れないであろうはずの同意の言葉だった。

僕も同じ、秋から逃げてきた。

誰にも理解されるはずの無い、理由と行動。

無機質な自然の音がいくつか繰り返された。

どれ位経ったか——香名は右手について軽やかに立ち上がると、面白そうな声で言った。

「知ってる」

見上げると、彼女は海風に身を晒しながら、今度は憂いを含んだ微笑を彼に送った。

前編 秋への階段 1 2 (後書き)

＊この作品は、FC2ブログのコミュニティ、「物語は素晴らしい！」内の企画「【秋企画】 Autumn Story 【お題物語】」の為に書いたものです。季節の要素が強引？ はっはっは。まあそういうことです。

夜道、と呼ぶには早いかもしれない。何せ、八時そこそこだ。

それほど都会ではないとはいえ、朝倉の普段暮らす街は、群ではなく一応立派な市だ。丘のような低い山が市境に存在し、その周囲の古い民家が立ち並ぶ場所以外は、それなりに近代的な街。

海岸から、その近くを走る線路を越えて市の中心方向へと朝倉と香名は歩いていた。

香名が立ち上がった後、どちらともなく海岸を離れたが、朝倉には特に向かう場所はなかった。

普通なら帰宅すべきだろう。帰宅して、授業の復習でもして洗濯やら何やらを済ませてさっさと寝てしまえばいい。そうして明日からまた始まる一週間の学業に備えるべきだ。

秋以外なら、そういうことをストレートに、何の曇りも無く行える。

だが、現在は十月初旬。彼が必要以上に敏感になって五度目の秋は、彼をとうとう意味無く海岸へと向かわせ、さらに夜になっても特に帰ろうというような気を起こさせないまでの怪物となっていた。無言で駅横の踏切を通り過ぎ、住宅街に入った辺りで、それまで無言だった香名が口を開いた。

「あなたは、名前は？」

大通りの交差点で、車のライトが街灯に照らされた路面の上の空間に光の帯を残していく中、思い出したように訊かれる。

「何て呼べばいいかな」

そういえば、教えていなかった。朝倉はすぐに自分の名前を伝えた。

「あさくら、朝倉秋人。あさい朝倉は、ちょうどあの駅の……」

通り過ぎて距離を空けた、背後の駅を視線で示す。その駅は、彼の苗字をそのまま含んだ名前だった。この辺りには多い、ポピュラーな苗字なのだ。

「で、下はあきと、ね」

確認するように頷いて、香名は笑った。

「あきとのあきって、季節の『秋』でしょう」

「どうして分かったの？」

驚く。香名はとぼけたように返してきた。

「勘よ。でも、秋だなんて、季節ぴったり」

皮肉っぽく目元が緩む。朝倉は、彼女が大体どんな種類の笑みを浮かべていても、共通した魅力があるか——どこか強さを含んだ、しっかりとした感情が奥の方に見え隠れしているのだ。

（不思議な人だな）

「ねえ」

信号が、歩行者に進めと合図を出した。二人は少しの間青い光を見つめながら動こうとしなかった。

「今から、帰るの？」

横断歩道の前に立ち尽くしたまま、朝倉は息を吐いた。それから軽く、首を振った。

「いや……家には、帰らない、かな」

「どうして？」

「言ったら？ 秋から逃げてるって。家も、さ、駄目なんだ」

強く秋が支配する範囲だから。寄り付くことは出来ないでもない。しかし、肌を蝕む秋の触り心地の中でこれ以上寝泊りするのはいざりしていた。

信号が点滅しだした。気の早い自動車が、少しだけ前に出た。

香名が、朝倉の手を取った。右手で、彼の左手を掴んで駆け出した。

対岸に辿り着いて、駆け足で乱れた息が整うまで何秒か待ってか

ら、彼女は提案した。

「ね、朝倉くん」

前から考えてました、と言わんばかりの顔。電信柱に付けられた街灯がスポットライトのように彼女を照らす中、宣言するように次の言葉が飛び出す。

「私のところに、来ない？」

「え？」

さすがに驚いて、彼はおかしな声を上げた。彼自身は高校生で、香名にしても、目一杯上のほうだと予想してもせいぜい大学に入ってたてくらいにしか見えない。そうでなければ彼と同じ高校生か。

「私達二人とも、同じものから逃げてるんだもの。協力しましょう」何をどう協力するのか。そう思わないでもなかったが、朝倉はそれを訊かなかった。自宅の香りや色を思い出したからだだった。

うんざりする。それは、五年間続いた広めの拷問部屋でしかない。家族が残した立派な一軒家。ここからさほど遠くない場所に立つそれは、彼にとっては既に忌まわしい。

「最近借りた部屋があるわ。ほら、二、三年前に出来た本屋の近くのマンション、その一室」

「いや、でも」

でも、何だというのか。何と無しに朝倉は恥ずかしくなって、顔が紅潮しないように気をつけねばならなかった。

「駄目？」

首を傾けて、香名は少しだけ残念そうに言う。だが目元は笑ったままだ。

最終的には、朝倉が承諾することを確認している顔だった。

＊

ずっと逃げ続けてきた。だけど、今度はきつと上手いく。そうでしょう？

そう香名は締めくくって、朝倉を連れてマンションに向かった。結局、いくら朝倉は一般常識的な、或いは倫理的な、そうでなければ単なる羞恥心から言葉を繰り出して見たが、そも彼には行く場所がない。最初から主導権は彼女にあった。先に朝倉の家へ寄って、最低限の生活用品などを持ってマンションへと向かった。

わけの分からない話の進み方ではあったし、混乱もしていたが、不思議と朝倉に不満はなかった。

ずっと彼は一人で逃げ回ってきた。秋の悲しみに襲われるなどという話を、まともに捉える個人は少ない。

二人とも、秋から逃げている。

香名のマンションは、キッチンのかつた居間と、広めの部屋が一つ、あとは風呂などからなるシンプルなものだった。無論、普通朝倉では手の届かないものだし、見た目だけで言えば同じ位の年齢に見える香名が借りているということも信じがたいものである。室内にはほとんど家具や調度品の類がなく、引っ越したて或いは引き払った直後といった感じの部屋になっていた。

朝倉は疲れきっていた。潮風を浴びたからかもしれない。軽く風呂に入って（香名は彼に先に入るようにと強く促したのだが）、居間にたった一つ置かれたシンプルなソファで横になった。人の、それもあまり知らない女性の家に上がりこんでいると言う緊張感も、気だるさが覆い隠していた。自宅のソファは、何となく近寄りがたく、五年前に棄ててしまっていた。久しぶりの家具の感触に、彼はすぐに眠った。

生きる上で不条理との出会いに事欠くことはない。ある意味で生存とは根本から不条理で不透明な代物で、死ぬまで不条理が目前を横切っていくのだとしても、だから、さして驚くべきことではない。

一家心中から取り残された、五年前の秋。それは朝倉にとって不条理な出来事の最たるものだ。

家族三人の心中のニュースは、一時的に全国的な話題となった。多くのニュースやワイドショーで取り上げられ、多くのコメンテーターや有識者や芸能人が多くのコメントを残してきた。

朝倉には、その中に一つ、今でもはつきりと覚えている言葉がある。

『――生きている限り、人間は皆死ぬわけじゃないですか、病気が事故か老衰か知らないですが、致死率は百パーセントですよ。今回の事件だけじゃないんですが、自殺する人たちっていうのはなんでそれまで待てなかったんでしょうか。死なんてももの、死後とあわせて我々生者には全く分からないもので、楽になりたいとか、何かそういう理由で自殺するのは論理的におかしなところがあると思うんですよ……』

それは全くその通りだと、朝倉も感じている。家族が自殺を選んだことについては全く共感も出来なければ、首を捻るしかないのだ。しかし、それとは別のことがある。

生とは不条理であり、その意味も、価値も、それ自体がなんであるかということもまとめて真に理解されることはないし恐らく理解できるものでもない。そして同じく正体不明の死によって終焉を迎える。だが死が全ての終焉かどうか、分かった物ではないのだ。

だから人は、不安定な生を不安定な死に向かって進まなければならなくなる。多くの人間は、単純な快楽や、人間関係における感情の嵐や、あるいは眠りによって、人生という期間が終わるのを待つ。生きる意味も、死ぬ意味も、その必然性も見出せぬと気がついた時、人はどうにもならない状況におかれるからだ。

いきているかぎり、にんげんはみんな、しぬわけじゃないですか

何故、長い人生に耐えうるのだろうか。朝倉は、ずっと自問してきた。

朝倉自身はまだ高校三年の餓鬼だ。その短い時間でさえ、彼は既

に限界だった。

もしかしたら、そういうところから、死の影は歩み寄るのではないか。当然ながら、朝倉にも一般的な死への忌避感がある。絶対に姉や両親と同じ道を辿ることはないだろうと思えた。

人は呼吸や食事によって生き続ける。だが、それだけじゃない。食べ続ける意志や息をし続ける意志がそこにはある。

それはどこからでてくるのだろうか。彼は、それを姉に聞いてみたかった。

生き続ける意志なんて、どこからくるのか。

どうして人は、生き続けていられるのだろうか――

ずっと考えてきたことだった。だが同時に、ここしばらくはあまり考えていなかった事柄でもある。それが何故突然また湧き上がってきたのか――。

朝倉は日差しに目を細めて、ソファから起き上がった。寝る時にはかかっていなかった薄いシーツのような物が肩からずり落ちた。それを拾って丁寧にたたんで、ソファの端に置くと、彼は室内を見渡した。

特に変った部屋ではない。恐らく建てられてからの年の浅いと思われる、綺麗な部屋だ。

朝日も、空気の成分も、自宅と変わらないはずだった。それでも、彼はひどく清しい気分だった。

秋は感じられた。ただそれはいつもに比べて薄弱な物だ。焼けるような悲しみはあまり感じられない。

「おはよう」

寝巻きだろうか、薄手のシャツとズボンを身につけた香名が戸口に立っていた。ぺらぺらの左腕の部分の布地がわけもなく可愛らしかった。

「おはよう」

「よく眠れた？」

「うん……とても」

偽らざる心境だった。満足そうに彼女は頷いて、脱衣所の洗面台へと向かっていった。顔を洗う音、歯磨きのための音、それらが聞こえる頃になって、朝倉は少しだけ笑った。

なんとも、おかしいことになったと感じたのだ。だが、実感から考えれば、それはわるくない状況だった。

＊

朝倉秋人と、香名と名乗った少女との生活は、さほど奇異な物ではなかった。秋から二人で逃げると言っても、例えば飛行機で外国に行くわけでも、家に閉じこもって季節感を締め出そうとするわけでもない。

香名は、「しばらくこの家で暮らしましょう」と彼に提案していた。何処に行くでもなく、マンションの一室でしばらく暮らそうと。朝倉に依存はなかった。彼女との生活は、既に秋の魔の手を大部分で退けていたからだ。

学校をさぼって日常を過ごしている事を除けば、平凡で、穏やかなものであり、そのことが逆に特徴的かもしれなかった。

香名はそれなりの資金を持っているようだった。昼間に二人で外出し、本屋や何かをまわり、疲れたり昼時であったりすれば喫茶店やファミリーストランへと入り、帰りにスーパーに寄ったりもする。朝倉の生活費は、香名は気にしないといったが、朝倉自身の持つ生活費から出すことになった。元々家族が死んでから遺産と親類の援助で一人暮らしを続けてきたことが、この時になって役に立っていた。

他愛のない話を多くした。香名は彼の学校の話などをよく聞きたがった。

「高校は楽しい？」

街の少し外側に近い場所の、安売りばかりしているスーパーの近

くにある喫茶店で、二人は汗をかいた紅茶のグラスを前に向き合って座っていた。

絶賛無断欠席中の人間に言うことではないと朝倉は感じて、笑いを堪えた。香名も面白がって言っているようだった。

「悪くないよ」

「悪くないって、変な答えね。でも、分かり易いかもしれない」

「実際、悪くないんだ。皆良くしてくれるし、担任だって悪い人じゃない」

「そう……」

遠くを見るような顔で香名が相槌を打った。

「クラスの人は？ 女の子とは仲はいいの？」

少々唐突だった。戸惑いつつも、答える。

「どうかな。よく話す人もいないではないけど……」

元々、友人は人並みにいても、あまり深い人間関係を作ることに熱心になったことがなかった。彼は、クラスの友人たちを思い浮かべてみたが、あまりはつきりと顔や声を一致させて思い出すことが出来る数は多くない。女子ともなれば尚更だった。

「そうだな、それほどしっかりした関係のある人はいないかな」

香名は、ふうん、と納得した様子で言って、テーブルに肘をつけてその上に自分の小さな顔を乗せた。

「もったいない」

「そうかな」

「あなたが、じゃなくて、あなたに声をかけない人が、よ」

「なんだい、それ」

「ふふ」

楽しそうだった。朝倉は、あまり意味がわからなかったものの、そんな香名の様子を見て、これはこれでいいか、と勝手に納得していた。

4 (前編 終)

4

「どうして、あなたは秋から逃げているの？」
隣に座った香名が訊いた。

何日目か、彼女は居間で二人して何と無しにCDを聞きながら（プレーヤーやCD自体は、朝倉が持ち込んだものだった）ぼうっとしている時に、質問を投げかけてきた。

それは難しい問い掛けだった。何せ、彼自身上手く自分に説明できない事柄なのだ。

「どうして、か」

「季節から逃げるなんて、変わった話でしょ？」

自身のことは棚に上げてか、香名は静かな清流を思わせる色の視線を向けてきた。

「秋自体っていうか——秋らしく感じることから、かな……」

時間稼ぎをしながら、考えつつ、少しずつ言葉に出していく。

情景や、味、太陽の動きや気温。季節を感じさせるものは多い。元々区切りのないはずの一年を四季に分けて感じるのは、それら様々な要因を人々が共通感覚的な部分から判断して振り分けた結果だ。

「僕は、秋になると、秋らしさを感じるすべてに嫌気が刺すんだ。

秋はちよつと耐え難い物を感じさせる。悲しみとか、諦めとか、泣きそうな気持ちとか、乾いた感じとか……そのどれでもなく、でもそのどれをも感じさせる」

あまり人に話すことではないかもしれない。ひどく個人的な話だ。聞かせること自体が失礼かもしれない、と彼は考えもしたが、そこまで話して香名を見ると、彼女は真剣に彼を見て話に耳を傾けていた。それほどに真剣な表情——刃物みたいな綺麗で鋭い表情は、今

まで彼は見たことがなかった。

「それは学校でもそうだし、家でも街の通りでも、何処でもなんだ。季節らしきなんてどこにでもあるから、大体何処に居たって同じで。特に自宅は駄目なんだけど」

姉の声――秋になるたびにリピートされる。

「そういう、大きく気持ちを殴りつけるような感じが嫌で、秋が嫌いなんだ。避けたいって真剣に思うほどに」

「自分の名前、嫌い？」

「ああ――嫌いだよ」

氷が解けて、グラスの中でバランスを崩した。澄んだ高い音が響く。一口その紅茶に口をつけて、香名は核心をついてきた。

「何故、秋に感情が刺激されるの？」

「……………」

言葉は、そこで詰まってしまった。

愛してるわ　ばいばい

神経痛のようだった。刹那的な痛みのように声が蘇った。

朝倉は、自分の表情が強張っていることに気がついた。そして、それを直そうとしてもどうにも上手くいかないことに内心でほんの少しだけ苛立った。

もしかしたら、それを察知したのかもしれない。香名は小さく頭を下げた。

「ごめんなさい」

別に謝ることじゃない。そう思ったが、それは上手く声にならなかった。

CDプレイヤーは、例えば同年代の女子に人気のありそうな邦楽ではなく、朝倉の好みでもあり、自宅に父が残したものでもある洋楽のCDを回し続けている。「ブラック・ドッグ」から「ロッキン・ロール」、「限りなき戦い」を経て、「天国への階段」へと進んで

いた。アルバムタイトルやバンド名すら書かれていない特徴的なジャケットの内側に納められていたそのCDには八曲が収録されているが、その中でも特に印象深い曲だった。

「私は、いろんなものを見捨ててきたわ」

染み入るような音楽の中で、香名は呟いた。声には、解雇と共にどこか懺悔めいた響きが混じっているように朝倉には感じられた。

「獲得できる可能性の薄い望みを得るために、多くのものを犠牲にしてきた。色んな人に笑顔で擦り寄って、踏みにじって見捨ててきたの」

彼女は目を閉じて、深く息を吸ってはいた。抽象的な話しぶりが、妙にこの場に似合っているような印象を朝倉は受けていた。

「最初は、良い事だと思ってやり始めた。でも、途中からは曖昧として……そんな感じになっても止めずに続けてしまっ、今にまで続いてしまっ……」

目を開いた。いつもの強さを湛えた、どこか皮肉で勝気で探るような両眼が、今は弱弱しく光を反射していた。心なしか、潤んでいるように見えなくもない。

「それが、私にとっての秋。ずっと秋を、人や色んなものを切り捨てながら過ごしてきた。ずっと逃げ続けて」

高らかな歌声が、盛り上がりを乗り越えて落ち着いていく。

「ごめんなさい。変な話ね。あなたに話させてばかりな気がしたから、私のことも話そうと思ったんだけど、上手くいかないみたい」ふっと力の抜けた、口元だけの笑顔が灯る。

強い存在感を持った、片腕の欠けた少女が、その姿相応の脆さを見せていた。それに気がついて、朝倉は心の底に冷えた何かを感じていた。

ほとんど、無意識的に口と舌は動いていた。

「五年前だ」

「え？」

いきなり摘み上げられた子猫のような顔で香名が朝倉のほうを向

いた。珍しいな、とその顔を見て彼は話に関係ないことを思った。

「中学一年の秋だよ。ちょうど今頃……気温が下がってきて、急に秋らしくなって、そんな頃だったな」

その年のことは、秋だけが鮮明に残り、他の季節の記憶がどこも曖昧になっている。

「僕は両親と、姉と暮らしていたんだけど、ある日、僕以外の皆が車に乗って出かけたんだ。ちょっとした買い物みたいな感じで……僕はそのとき風邪か何かで寝込んでいた」

時間が引き延ばされたような、風のとき特有の時間間隔の中でまどろんでいたのだ。

「自宅で眠っていると、電話が入った。出かけた家族は、一人残らず死んだって報告だった」

香名が息を呑んだ。CDが次の曲を流し始める。少し明るい曲調だ。

「どうして？」

「自殺——心中だって、そういう話だった。わざわざ背の高い崖から海に向かって車で落ちていったらしい。遺書も何もなかったけど、タイヤの痕や目撃情報から、まず事件って事はないって警察の人は言ってた」

捜査は慎重に行われ、一年ほどは頻繁に彼も警察に呼ばれた。だが、かなり信頼性の高い目撃者の存在や、現場の物証から、どう考えても自ら進んで車はダイブしたのだという結果に辿り着いた。

「それからずっと、秋は存在感を増してしまっただけ、僕はこの季節が何よりも嫌いになったんだよ」

一気に話してみれば、さほど難しいことではなかった。秋嫌いの理由、その告白は。

「心中って……」

「理由は、分かってないんだ。僕も分からないし、警察も知らない。家族は少なくとも見かけ上は仲が良かったし幸せにやってたんじゃないかと思う。ほんとに、いきなりだったよ」

参るよね、といった感じを装って軽く朝倉は首をすくめた。だが、香名は眉を寄せて、苦しそうにしていた。

「私は――その」

三度謝るような素振りを見せた彼女に、慌てて朝倉は首を振った。「いや、僕も本当にただただ不思議なんだよ。家族の死が押し掛かっているとじゃなくて、ただ単に、秋にそんなことがあったから印象深くて……」

喉の奥に、何かがせり上がる感覚があった。幻でしかない、心情的なものだ。

（何を……）

何を、言っているのだろう。

家族のことは、嫌っていたわけではない。両親は人並みに信頼していたし、姉は尊敬に価する人間だった。いきなり消えて、未だに彼らの死の実感が朝倉にはなかった。人に話してみても、初めて彼はそのことに気がついていた。

香名が、そっと彼に近づいた。同じソファに二人で並んで座っていたのだが、彼女は少しだけ位置を変えて、彼の方に身を寄せたのだ。

それだけで、不思議なことに喉の奥のつまりは消えていった。頭の中に響く声さえ、霞んでいく。

愛してるわ　ばいばい……

その日は、初めて部屋を分けずに、二人して居間で眠った。布団や毛布を適当に床に敷いて、並んで寝転び、遅くまで色々なことを話した。横になった視界の中で香名はころころと表情を変えて話し、また朝倉の話を真剣に聞いたりしていた。香名は半袖の薄手のシャツを着ており、時折その袖口から、腕のない左肩が覗いていた。出っ張りも何も無い、綺麗な肌だけがある。薄らと傷跡のような物が確認できるが、それとてほとんど目立たない物だった。まるで最初

からそういう形であるかのような、自然な形状。

（なんでこの人は、腕を失ったんだろう）

彼の疑問を含んだ目の動きを追って、香名は横になったまま、シヤツの首の部分を広げて左肩をあらわにした。

「これ、根元から無いの」

朝倉は、声に出して尋ねたりできなかった。香名の左肩は、綺麗な肌が丸みと、肩の辺りの骨の形を覆っている。障害の無い人間には無い形だった。

「変、かな」

はにかんだ、もしくは照れたと表現できそうな、そんなように見えた。

「綺麗だよ」

あっさり、率直な答えを言ってしまってから、彼は大いに照れた。香名も同じく照れたようだったが、少しすると、二人して笑った。

夜は更け、二人は向かい合ったまま眠りに落ちていった。

＊

香名と言うその少女には、ゆるぎない生が感じられた。朝倉が自らに抱いているような不安定さがそこにはない。

（彼女は、きつとなにか、あるんだ）

生き続けるに足る何かが。最後には確実に死んでしまう人間でありながら、生き続けることの出来る何かが。

彼女と共にいれば、それが何であるのか、分かる気がした。もしかしたら、手に入るものかもしれない。だが、それを自分が手に入れたと思うかどうかを自問すると、はっきりとしない気持ちしか出てこない。朝倉はあと少しで晴れそうな霧を前に立ち尽くしている森の中の旅人さながらだった。

波が今日も打ち寄せている。香名と歩きながら、彼は海を見た。香名とであった場所、秋と少しばかり離れられる場所。いつもと変

わらず波が舗装された岸にぶつかり消えていく。香名とであつたときよりも、ほんの少しだけこのコンクリートの岸も削れているかもしれない。

「ここは、いつも変わらないように見えるわ」

強めの風に、髪を右手で押さえながら香名はそう寂しげに言った。手が一本であるために、髪と同じく煽られている服などはばたつき放題だった。今日の香名ははじめてあつた時とは違う、しかし印象はよく似た服を纏っている。繊細に細工の施されたスカート部分が揺れて、白い足が覗いていた。

空は曇って、日差しはあまり感じられない。そのせいか、彼女の肌もいつもより病的な色に見えた。それが逆に何か神秘性を増しているとも感じられる。

朝倉は、自分が彼女に惹かれていることに気がついていていた。焦がれていると言ってもいい。

（馬鹿馬鹿しい）

自覚する。だが、したからといってどうなる物でもなかった。出会って半月に満たない少女が、この上なく彼を引き付けている。

「同じ香りがする。同じ風が吹いてる」

「……冬になれば、風は強くなるよ。それに、夏になると潮の香りが少し、強くなる」

彼が言うと、香名は軽く声を殺して可笑しそうに笑った。それもやはり、寂しそうだった。

「そうかもね。でも、変わらないように感じる」

そうなのかもしれない。そう、不思議なその少女が言うなら、そうなのかもしれない。

人気も、砂浜もない海岸は、長々と続いている。昔津波の被害に遭ったとかで、神経質にコンクリ補強したのだと、彼は聞いたことがあった。

その海岸の先のほうを向いて、香名は提案した。

「ね、少し向こうの方まで、行ってみよう」

彼が頷く前に、彼女は駆け出していた。

ヴィヴァ　チツシマメンテ
非常にいきいきとした速度で。

二十メートルほどか。軽く香名は走り、その後ろを朝倉は追いかけた。ある程度の距離をいったところで、香名は立ち止まった。ほとんど息も乱れていない。

「ここは、いいところね」

同意を求められて、朝倉は少し遅れてからああ、と返事をした。

「私は、あなたに会うまで来たことなんてなかった」

遠いところを見ている顔をして――実際彼女は遠くの海面を見つめていた――立つ香名に、没する直前の日の光が当たっていた。幻想的な色合いが、表情と混ざって一つの絵画を見ているような印象を与える。

「……私は、ずっと、私の……仕事みたいな物を成功させるために、生きてる」

仕事、といった時の口調は、それが適当な言葉を捜して見つからなかったか、あるいは正しい言葉が言えない時に、苦し紛れに言うような、そんな言い淀みがあった。

「大事なこと？」

朝倉の声に、香名は力を抜いた。全身から緊張も、いつも持っている力強さの一部も消えて、薄い幻想だけが残る。

「私の、全て」

朝倉は、その言葉に、その言葉を発する彼女の姿に、巨大なハンマーで殴りつけられたような感覚を憶えた。

それは、熱を持っていた。熱く脈動し続ける、意志――それをし続ける意志。そして、意思。

香名は、それが何であるかを語ろうとはしなかった。秋の話をしたときと同じだった。

彼女には、凄まじく強い、一本の柱のような、生を貫く意志があ

る。それを、朝倉は肌で感じていた。

生きている限り人間は皆死ぬ――

家族は皆、寿命でも事故でも病気でも戦争でもなく、死んだ。いつか死ぬ人間の死の一つの形として、それは否定することの出来ない形ではないか。

そして、自らにもそんな選択があるのではないか。いや、世界中の人間は皆、いつか死ぬ虚無的な人生を生き、それゆえに、誰であっても自殺の可能性をしっかりと胸に抱いているのではないか。

そんな、家族が死んで以来どこかで持ち続けてきた考えが、朝倉の中で、粉々に砕かれて、破片が体の内側から彼を突き刺した。

かつてそれほどに心の中で強い嵐が起こったことはなかった。朝倉は、恐ろしいほどの速さで自分の心が変質したことを悟った。

霧が晴れた。秋が、彼を貫けなくなった。

「……君は――いや、君が」

彼は、驚いた顔のまま、言い放った。

「好きだ」

脈絡も落ち着きも前置きも心の準備も相手への配慮も何もない言葉だった。そして同様に、脚色も騙りもない。

「ありがとう」

香名は晴れやかな顔で海を見つめていた。

朝倉は、何となく、その思いが成就することはないだろうと、直感していた。それでも、もう秋に悩まされることも、幻聴が聞こえることも、海に逃げることもないだろうと、そう感じた。

日が落ちる。

夜の色が舞い降りる。

そして、朝倉の見つめる先で、香名に向かって光り輝く一条の光が降り注ぎ、その細い体に接近して、爆発した。熱が渦巻き、光が強く海を照らした。

(後編
へ)

後編 限りある戦い 1

後編

1

彼女は声を失う。彼女は想いを伝えることは出来ない。

彼女は足に痛みを得る。彼女はそれに耐え続けなければならない。

彼女は彼の思い違いを正すことが出来ない。彼女は結ばれない。

彼女は彼に刃を向けられない。彼女は泡となって消える。

許せないのは、選択の積み重ね。

ちくしょう、ちくしょう……

＊

愛してるわ、ばいばい

放り出した先で、少年の体は貫かれ、海面に落ちた。重い水音がしたと同時に、少年を追って数人の男達が海へと降り立った。彼らは少年を引き上げると、その体を引き裂き、それぞれが啜る。悪趣味な食事風景が展開される。

見慣れてしまった。少年を見捨てた少女は、もはや沸きあがってくるこのない吐き気を強烈に懐かしく思った。自分の無感動さに、嫌気がさしていた。

彼女は宙を滑るようにその場を離れると、一気に転移した。同じ時間の、別の場所へ。そうして敵から逃げ、その後「本来の」機能としての転移を行った。

秋が、意識を満たす。懐かしくもあり、何度も味わった物でもある、秋。

体内に格納した装置が、意識によって確認された秋をその目標として設定する。数値化、量化、分析、計算・修正・計算・修正……。過去の秋。分岐してしまった現在とは別たれた、別の三次元的膜^{ワールド}宇宙。

激しい力。空間から時間を潰してしまうほどの。世界が線に置き換わるイメージが脳裏に膨れ上がり、そして瞬間的に弾ける。線が切れ、たわみ、絡まり、どんどん加速しながら置き換わっていく。

秋へ、秋へ、秋へ……

＊

十年近くも前になる。

空が澄み切って、日が強く照っている。反面空気は涼気に満ちていた。秋晴れだった。

浜名時子は、誰もいない海岸を一人で歩いていた。通っている高校の制服のままの姿で、スカートの端を風に任せつつゆったりと足を動かしている。

（なんだかな）

その日は、定期テストがあったために半日ほど学校からは解放されていた。開放感はいっぱいとあったが、彼女は自分が浮かない顔をしていると分かっていた。

両手を組んで、伸びをする。少しでも気分が晴れる。

別に、何が悪いわけでもなかった。悪くない、悪くないのだ。人並みの友人に、人並みの成績、人並みの家庭に、人並みの将来。悪くない。

「……………」

それでもどこかぱっとしないのは、なんとなく、ずれがあるから

だ。彼女はそう思っていた。

（幸せに生きて、で、一生があって、それでなんだって言うんだらう）

茫漠とした広がりを持つ人生。だが、それを送ることに、疑問がついて回る。

さほど真剣に考えていたわけではない。昔からよくへんなことを考えてしまう癖があるというだけだった。或いは、年頃の若者が抱く思春期的な悩みと言ってもいい。なんにしる深刻ではない。深刻ではないが――

「なんだかな」

こうして時々、意味もなく知らない場所へと歩いていって、ぼうつとすることになる。疲れているときや、暇のあるときなどに。

波は静かで、動く物の気配の少ない海岸の風景と合わさってまだ夕方だというのに、間延びした静けさが広がっている。海岸はコンクリートで固められた階段状のもので、砂浜や岩礁に比べればひどく色気がない。

もっと綺麗に、歩道を整備したり街路樹を植えたりすればいいと彼女は思った。海は決して汚くない。寂しいこの海岸だって、上手くすれば今よりもいい場所になるだろう。

今だけは、この寂れた風景が心地よかったが――。

しばらく歩きながら、時折海の方を眺めていた。歩き、海を見、その繰り返しは何セットか消化されて、そろそろ長く続く海岸の中間にまで達しようかという時、海の方を向いた彼女の首が動きを止めた。

人の姿を見つけたのだ。

いくら寂しい場所と言っても人が全くいないわけではない。だが、見つけたそいつは、こともあろうにコンクリートに横になって、穏やかに寝息を立てていたのだ。

「ちよつと……」

吃驚して、恐る恐る近寄る。幅の広い階段といった形状の舗装が

なされた、その真ん中辺りの段に慎ましくも大胆に転がっている。物静かで大人しそうな、少年だった。

「これ、うちの制服だ」

少年が着ているのは彼女が通う高校の制服だった。味気のない長袖のシャツは、本格的な冬服に入る前の準備段階、秋のものだ。胸のポケットに小さく刺繍された高校名は、その色で学年が判るようになっていている。そしてその色は、彼女のスカートの普段は見えない位置に縫い付けられた物と同じ色だ。

同じ学年。だが面識はなかった。

（どうしよう）

少年の近くには、彼のものと思しき鞆が放り出されている。放っておけばいい。常識的な判断として、当然の選択が浮かぶ。が、それを打ち消して、時子は考えていた。

何か、その少年には放ってはおけないような、危うさと言うべきか、危うさと同居する不思議な繊細さを感じられた。

付け加えれば、時子は人よりも少しだけお人好しだった。

「ええと」

すぐに起こした方がいいだろうか。気持ちよく寝ているようだが。屋外だし、安全だとは言いがたい。けれど今のところ辺りにはひどくのどかな午後の空気しかない。

迷った末に、時子は恐る恐る彼の肩に手をかけようとした。じつと彼の顔を見つめ、できれば自然に起きないかと期待しながら。と――、

「あ」

目が開いた。

「あ」

思い切り正面から――それにやや近距離から視線が正面衝突を起こしていた。時子は自分以上に相手が驚いていることをすぐに察した。

彼女なりの機転の利かせ方――挨拶。

「……こ、こんにちは、えっと、お目覚め？」

秋人はきよんとした目つきで彼女を観察した。すぐに破顔した。おかしい状況にひとしきり二人で笑ってから、彼らはお互い同じ学校の、同じ学年の生徒であることにまず驚き、互いに名乗りあい、その場で談笑した。

＊

出会いは少々特異な物であつたかもしれない。例えばクラブ活動で知り合うといったようなことと比較すれば。朝倉はUFOから降り立ったわけでもなければ、時子は別世界から召還された戦士でもない。二人の関係性は、あくまで一般的といわれる線の上を、やや蛇行しながらも慎ましくなぞっていった。

時子は漠然とした空虚を胸に抱え、対して朝倉は大きな虚無感に苛まれていた。普段は二人ともそんなことはおくびにも出さない。ただ、体育を終えて更衣室に向かう彼女と教室移動で美術室に向かう彼がすれ違う時など、ほんの僅かな視線の交錯があるだけだ。

時々共に帰るようになり、たかだか三十分に満たない下校時間の中で多くのことが二人の間で話された。他愛ない校内での出来事から、お互いの様々な事情、多くは他人にとってどうでも良い、些細なことである。

その些細なやり取りが、恐らく彼らにとっては最も大事な物のひとつであつた。

二人はその内に海岸のことすらすっかり忘れかけていた。朝倉も時子も、半年が経つころには既に言い知れぬ心の中の空漠さが消えていた。

最初からどうでもいいような問題を抱えていたというわけではない。二人の構築した関係性が、大きな力を持っていたのだ。大きな力、人と人との価値ある関係性――。

抱えていた物がどれだけ困難な問題であれ、偶然発生したこの関

係性はいとも簡単に二人を晴れ晴れとした気分させていた。

幸運だった。朝倉は、例えば秋が来るたびに神経過敏になるというようなこともなかったし、時子は、「例えば」死に物狂いで侵略者と戦うような状況に疲れきらずにいられた。

映画、買い物、観光、呆れるほどに単調で、鮮やかな日々。

秋は彼らを打ち抜けなかった。彼らは季節に勝利し、謳歌していた――何にはばかれることもなく。

同じ大学に進学していた。

一年が経ち、様々なことが変化し、感じるものもそれにあわせて変わった。以前とは味わいの変化した秋。二人は、慣れぬバスでの通学を続けていた。朝には人が多く、二人して辟易した。

幸福のイメージ。なぞるように、ラインを、蛇行しながら。

予め何かが定められているとしたなら、定めの内側にいる物はそれに気がつくことが出来るか、否か。

彼と彼女は偶然に出会い、互いにとって価値ある関係性を見出した。それが、一体どういった力の働きによって成された物か……

子供が力任せに蹴ったように、バスが折れ曲がり、乗客を浮遊感が襲った。下腹が痒くなるような重力の軽減。そして、浮ついた内蔵を貫く振動が続いた。

地面に殴りつけられたようなものだった。実際、時子はバスの床面がとてつもない速度で上昇してきたのだと一瞬勘違いしそうになった。金属の上に樹脂の板と塗装を施しただけの床が、彼女を激しく打ち据えた。胸の奥で鈍い音が聞こえた。

その日もバスは満員状態だった。席は全て埋まり、残ったスペースの半分以上に立ち乗りの乗客が並び、運転手は無愛想に車内アナウンスを続け、安っぽいプラスチックのつり革の握りが揺れる――そういった全てがかき混ぜられ、加速し、なにかにぶち当たり、転がった。

(……………)

分かることなど何も無かった。時子は、ただ感じていた。青ざめた空気の手触りを――。二十名近い人間が皆倒れこみ、苦悶の呻きが重なって聞こえる。

喉が詰まった。上手く息が出来ずに、時子は短い、切れるような吐息をいくつか吐いた後に大きく吸った。

人いきれの中に、血の匂いが混ざっていた。

見ている光景が歪む。眼球が揺れている。歪んで、回っていく。

音が、幾重にも重なって聞こえる。息遣い・軋み・あえぎ・悲鳴・炎のはぜる音。

時間が引き延ばされて感じられていた。激しい恐怖が、深い霧――呆然としてしまった表面的な心理に隠されて、上手く感じられない。

腕を支えに、立ち上がった。濡れた服が肌に張り付く、不快感が体のあちこちに感じられた。自分の物かどうか、判別のつかない体液――黒く、粘る熱いそれが床をべっとりとぬらしている。

「秋人……」

まるつきり力の入らない声。死人の声。青く暗い声。

手足が、そっくりそのまま金属製のオブジェに交換されたようだった。冷たさが四肢の実感を奪い、動かし辛い。胴は、気持ち悪さの塊だった。ねじれ・潰れ・混ざり……規定の位置関係が狂った肉袋に成り果てている。

這い上がってきた物を飲み下して、何とか彼女は顔を上げた。共に乗車していた朝倉秋人を探す。天地の判別が怪しい。視神経が平衡感覚の異常とタッグを組んでサーチを阻害する。

彼女は昔、同級生の男子がペットボトルの中に生き物を詰めて振り回して遊んでいたのを思い出した。オタマジャクシやカエルやバッタ、ミミズなど、様々な生き物がボトルの半分ほどまで集めて詰めこまれ、蓋を閉じたそれを思い切り振るのだ。

子供にありがちな残酷さと好奇心による遊びだったのだろう。元

の形を半端に奪われた生き物達の造形は、その種類に関係なく共通したグロテスクさを持っていた。

バスの車内は、その拡大バージョンだった。遊びすぎて関節のいかれたロボットのフィギュアのようなでもある。奇怪な光景だった。

「^{イー}は^{ひじょう}緋衣、^は喀かれし血、怒りに^あ或るは
悔悛に酔う人の、美しき^{しゅしん}朱唇の^{えま}笑い

おおおおおおん、おおおおおおおん……

助けを求める声も、ただただ苦しむその声も、どれも同じに聞こえた。重苦しい、響きそのもののような音。

その中心に秋人は居た。懸命にもがき、肘をついて身を起こそうと苦闘していた。頬が黒く染まっていた。電気の消えた車内で、それは赤くは見えない。ただ、匂いが正体を悪戯に仄めかすのだ。

「秋人——」

死人の如き弱い呼びかけ。それでも、しっかりと届き、彼は顔を無理矢理に上げた。

腕を伸ばし、手の平を差し出した。彼を助け起こす為に、彼女は一步、足を引きずった。

そして、二度目の衝撃。

光が降り注いだ。暗い森林に差す朝日——もしくは、透明な雨。

何かきらきらと光を反射する、細長い物が立て続けに落下してきたのだ。それらはまずバス天井部分をやすやすと通過した。まるで水面に張った油膜に洗剤を垂らした時のように、硬い金属の天井が光が通過した部分を中心にとんでもない大きさの穴に侵食される。スケールは異なるが、銃弾の貫通した痕にも似ていた。

ビンゴ用紙のように穴だらけにされた天井の下、そこに転がっていた秋人は、咄嗟のことに、気がつくことすら出来ないでいた。時子の方を向いて、無理矢理に笑顔を浮かべようと努力している最中だった。大丈夫だ、生きている、何が起こったんだろうか、早くここから出ないと、なあ——

雨が彼の体を打った。

いかに鍛えようと、当たり所が良からうと、人体は車体になうことがない。強度の低い脆弱な身体。そこに光る物体がいくつも突き刺さった。

戦車の長い筒から吐き出される、巨大な砲弾をショットガンに詰めて散弾として一気に撃ち出したら、どうなるか。それも、人間一人に対して。

秋人が受けたのは、そういった程度の攻撃だった。骨も肉も関係なく、柔らかに散らされ、舞い踊る。

時子は差し出した腕を、彼の方へと出来うる限り伸ばした。

力の入らない、左腕を。

空からやってきたそれは、勿論区別などしなかった。腕一本分だけ、彼女は彼と同じ体験をすることとなった。筋肉と骨と皮という

構造をお構い無しに、一纏めにゼリーのように貫通し砕く。

悲鳴を上げることはできなかった。力を込めて肺を動かし喉を震わせることは、今の彼女には重労働過ぎた。

彼と彼女の腕をいくつかの破片、人体の原材料といったところにまでその構造を滅茶苦茶にしてしまったそれは、彼らを突き抜けて床を打ち破り、その下の地面に刺さって尚たっぷりと残しているエネルギーを、衝撃として撒き散らした。

時子は幾分軽くなったと実感できる自分の体を、その衝撃が持ち上げるのを感じていた。痛みと混乱とごちゃ混ぜになった処理しきれない動転の中で、またも浮遊感が続く。

しばらくしてどこかに投げ出された。硬いものに背中があたり、仰向けに転がった。

空が見えた。秋空だ。

どうやら、バスから外に飛び出したらしかった。或いは、バスそのものがまともな天井の糸欠片も残されていないような状態だったのか……。

その澄み渡った空に、何か黒い物が見えた。

(誰……)

肺が震えた。息が止まろうとしていた。

最後に、彼女は自分達を貫いた光が一体何物であったのか、引き伸ばされた感覚の中で見た記憶を想起し、その正体に思い当たっていた。

細く、光を照り返し、飛来した物。見覚えがあった。

(あれは、秋刀魚だ……)

*

ハル、ハル、ハル！

香名は絶叫していた。ただ、損傷した喉からは声が出ていなかった

た。それに、彼女の呼ぶ相手は彼女の外には存在しない。

(ハル……)

『落ち着いて、香名』

声は頭の中でひとりでに響いた。より正確に言えば、彼女の意識の中だけで。

(ハル、私は、今は)

『香名、時間遡行が終わったのよ。ここは次の秋。前に戻ってきた時より一日前の午前一時——』

香名は混乱していた。

時間遡行——時間移動は、意識に酩酊に似た作用を与える。数ある可能性時間世界を下って、まだ分岐する前の時間を探し出すのは人間本来の生理的認知能力であり、見つけた時間へと歪みを使って転移する時、人は時間感覚の変異に晒される。そのせいだった。なにせ、時間移動にかかる『時間』は通常の時間ではないのだ。

普通なら、酔ったようになって、意識が落ちることはない。ただ、今回の場合は「前の秋」で散々やられ、今にも気絶しそうな状態で無理矢理に転移した為に、転移中に眠ってしまったのだ。

プランク時間よりも更に短い一瞬、あるいは何十時間もの長い時間。そのどちらでもある転移中の時間は、時に悪夢をもたらす。

長い、実感を伴った夢が、意識の安定感を損なうのだ。

(ここは本当に？ 私は、夢から覚めたの？)

『その証明は難しい。でも、私の中のログはあなたの見ていた夢を全て記録している』

声は、まるきり香名の声と同じ声だった。ただ、香名自身には若干違う声に聞こえる——テープに録音した自分の声に多くの人間が違和感を抱くように。

『あなたがはつきりと能動的に私を使うことは、少ない。危機的状況にあるときだけよ。戦いだったり、重要な判断を迫られたり、今みたいに錯乱してみたり』

突き放す声音——だが優しい響きが漏れ出している。ハルの、彼

女にしか聞こえない声。

しばらく、途切れ途切れに短い息を繰り返して吸っては吐いた。落ち着いてくると、状況が見えてくる。

香名は辺りを見回して、それから自分をじっくりと観察した。

辺りの景色は、そこが見慣れた街の一角、人のいない林の中であると彼女に教えていた。

自分の体は、この上なく危ない橋を渡ったのだということを教えてくれた。あちこちがひどく焼け爛れ、たった一本の腕は二の腕が大きく裂けて内部まで熱が入っている。胴にもいくつか穴が開きかなり深くまで損傷が及んでいた。

（ハル――）

声を出しているつもりだった。それも、喉が壊れて微かな空気の音が漏れるだけだ。ハルの声が彼女にだけ聞こえるように、彼女の声もハルにしか聞こえていない。

ダメージを受けることに関しては、彼女は慣れていた。少なくとも慣れているという自負だけはあった。今回のような大きな損傷は珍しいが、何度も傷ついてきた。普通の人間であれば、一体何度この世に手を振って旅立たねばならなかったのか。三途の川の渡り賃だけで船が買えてしまう。

（私は負けたのね）

確認する。ハルに、自分に。時間移動をしたことが、その紛れもない証左であった。

『幸い、転移装置に損傷はない。空間制御が完全だから、折りたたまれた中のもの――エネルギー炉も、再生用機器も資源も、それらルカーも、全て無事。あなた自身はひどい状態だけど。総合的に見て残った機能が三割と言ったところ』

並ぶ言葉と同時に、意識内ではその単純な報告とは比べ物にならないほどの情報が圧倒的な奔流となって駆け抜けていく。数値化された体の各部の状況、兵器の損耗率、前回の戦闘のログ、これからの展望、確率、見込み、エトセトラ。

とても把握できる量ではないが、ハルはその全てを理解している。そして、ハルが理解する限りその情報たちは最適な形で瞬時に香名にも理解される。

『しばらくは再生に時間を使うことをお勧めするわ。機能の大部分を凍結して自己修復に当てれば、すぐに全快できる』

そう締めくくる。戦闘のあと、それから時間移動の後は、情報の整理を行いこれからを正しく判断する。それは戦いに勝つ為の、方法の一つだった。ハルの存在意義の一つでもある。

沈黙し、返事を待つハルに、香名は静かに問いかけた。

（今回で何回目？）

少し、突然だったかもしれない。ハルは彼女にしては珍しくほんの一瞬間を空けた。が、すぐに答えた。

『三十度目の時間移動。作戦も、三十回目よ。一回の世界につき平均約二ヶ月――これまでに四年と七ヶ月が経過。行動継続に必要なエネルギー全体の貯蔵量は、開始時に換算して残り八・三パーセント』

戦いも終盤ということだ。多くの戦いを経て、その全てで生き残り、その全てで敗北し、その全てで――

（彼は）

『絶望的だった』

失敗したのだ。強烈な実感が、一気に襲ってきた。背中にビルが押し掛かってくるようだった。壁面のコンクリートの冷え切った、冷たいビルが。

（また殺したのね）

『殺されたのよ。あなたは助けようとした』

吐き気を覚える。そんな弁護――弁解が、ハルの言葉として出力されるということが、たまらなく卑怯だと感じた。

（ハル、私は、成功の見込みが薄いと知っていて、続けてるのよ）
『ゼロじゃないわ。前前回はかなり上手くいった。敵の半数を撃退できた。前回は運が悪かった』

（一度も、完全に勝ったことなんてない）

『繰り返せば繰り返すほど、私達は有利になっていくわ。敵を深く知っていくということなんだから……』

（でも）

あふれ出るものがあつた。もし顔を焼かれていなかったら、はつきりと涙が零れ出ていただろう。

（繰り返すだけ、失敗するたびに、彼は死ぬわ。彼だけじゃない）
何度も、迷ってきたことだった。そしてその度に、続けることを選んできた。

しばらく、声を出せず、涙も出せず、彼女は泣いていた。誰もいない夜の林の中で。

『……敵は、当初の予想よりも数が多い。力も強い。時間移動にも戦闘にも大きなエネルギーが必要になる。私達のタイムリミットは五年ほどと定められていたけど、それは恐らくもつと短くなる。戦いに力を注げば、それだけ消費も激しくなる。だから』

冷静に・冷静に・落ち着いて。それが、もっとも良いという信念。
『恐らく、すぐに最後の戦いがやってくる。今更迷うことには意味がない。最後のそれが、上手くいくかどうかしか、私達には残されていない』

愛してるわ、ばいばい

繰り返される声。最初にそのフレーズを聞いたのは、何年前か。

遠い記憶の中、秋人が語ったことだ。その中で聞いた、顔も知らない人の言葉。

（今更ね）

『今更よ』

最後に向かって、既に選択できるような時点は過ぎてしまったのだ。

香名は目を閉じた。ひっそりと眠る為に。

そしてまた夢を見るのだ。

＊

何かの音が、断続的に聞こえていた。規則的であるようで、よく聞いてみると全くランダムな揺らぎの音。寄せて、引いて、うねり、また寄せる。

（海の――波の音だ）

時子は思い出して、自身に向かってそう囁いた。

何もかもが曖昧だった。きっちり塗り分けられていた認識の色彩が、すっかりパレットをひっくり返して濁った一色に統一されてしまったようだ。

自身の形がまずあやふやだった。体の境界線が分からない。外海との接点がぼやけて感じられる。

彼女は恐る恐る目を開けた。つもりだったが、瞼の感覚はほとんどなかった。灰色の沈黙が視覚のすべてを満たしている。

恐ろしかった。震えることも出来ない状態が、たまらなくひどい恐怖を与えていた。

（誰か……）

その呼び声に反応したというわけではないだろう。だが、かろうじて生きているらしい聴覚が、人の声を捉えた。

――おい、起きてるんじゃないか？

――え？

――やっぱり！ 覚醒してるよ、これ。大変だ、何てタイミングだ、天の助けかも。

――本当に？ いささか信じ難い気がしますけど？

――本当だって、ほら！ やっぱり僕のいったとおりだろう、処置を続けていて良かったじゃないか。

――馬鹿みたいに費用がかかっていたんですよ。回収できればいいんですが。それにこの子、こんなになって生かされて、怒るんじゃない

ないですか？

——さあね。まあ、選択は最大限尊重するさ。ああそれと、多分この話、彼女には聞こえてると思うよ。

——ええ？　ちよつと、嫌われたかもしれないじゃないですか、早く言ってくださいよ！

男と女の声だった。男の方はやけに明るく愉快そうで、活発な印象を受ける。ただ、どこかマッドな感のある快活さだが。それに対して女の方は、若く、男ほどではないが生き生きした印象である。

（誰か）

もう一度呼びかける。声は出ない。喉はほとんど動かない。声なき独り言に過ぎない求め。そのはずが、

「はいはい、聞こえてるよ」

男の声が、まるで真面目な部下からデスク越しに大声で呼ばれた、のろまな上司のようなおっとりした声で答えてきた。

混乱する。その声は、先の肉声よりも格段にクリアに聞こえてきていた。それに、ただの音声情報ではない、もっと分かり易い何かに感じられた。整理して上手く言い表すことは彼女には出来なかったが、とにかく味わったことのない、奇妙な感じだった。

そんな状態の彼女に、軽く笑いを混ぜながら男は説明した。

「今の君は、眼も見えないし声も出ない。眼球は焼けてしまっているし、喉には穴が開けられて呼吸用の機械が入ってる。かろうじて耳は聞こえるけど、それもあまりあてにはならない。だからこの声は、君に直接届けてる」

（直接？）

「脳だよ。呼吸器よりは複雑な機械だけど、まあ一緒だ。頭に仮に埋め込んで、こうして電子情報を介して会話してるんだ。僕の声も君の心の中の呟きも、コンピューターが仲介してるってわけ」

（そんなことが……）

「別に驚くようなことじゃない。君が生まれたころには既に脳に直接機械を入れることで、生まれつきの全盲患者に白黒の映像を見せ

ることだって出来たんだから」

（つまり私は、機械につながれた、死にかけの、喋れもしない見えもしない人間で、頭で直接あなたと関わっているってこと？）

「その通りだ！ ついでに左腕だってない。理解が早くて助かる。

君は寝起きがいいほうだね」

ブリバダヴァーチリ

「ちょ、ちよっとちよっと先生！ もっとう、最初はソフトに、優しくしようよ！」

女の焦る声。こちらは機械を通して彼女に届いているわけではなく、遠い声だった。

「私の部下が騒がしいが気にしないでくれ。とにかく、君はまだ生きています」

生きている。生存。

（……いつから——今はいっつ？）

「君が意識を失った日から、ちょうど五年ほどだな」

（ここは？）

「研究施設だよ。僕が所長だ。君は僕らの研究の為にここで眠っていたんだ」

（分からない）

「何処まで覚えてる？」

考える。穏やかな日々。巡る季節。制服、卒業、入学式。私服での登校。通学のラッシュ。バス。バス、バス！

（バスで、何かの——事故に、遭って）

あるかどうか疑わしい心臓が、急に鼓動を早めた。ぼやけていた記憶が徐々に順序だてて整理され、認識されていく。

「先生！」

「落ち着かせて。意識が戻って、初めて思い出して混乱してる」

顔が頭の中一杯に並んでいった。気味の悪い絨毯の柄のように、バスの中で見た死に掛けの乗客の顔がぎしぎしと膨らんでいく。

「落ち着いて」

男が、それまでとは変わって静かに言葉を吐いた。残された腕に、

何か重みが重ねられた。男が触れているのだと、何となく分かった。何か、薬品でも打たれたのかもしれない。急激に嵐が収まり、ぼやけた心が戻ってきた。

（私は、私は……）

「君は助かった。だけど、ほとんど死に掛けてもいた。病院に運ばれた時にはほとんど絶望的だったんだ。しばらく植物状態で保護されていたけど、事故の――事件の、と呼ぶべきか――ショックで君は意識を失って、体は肺も心臓もぼろぼろだった。機械の助けがなければならぬほどにね。大脳や脳幹はかろうじて生きていたけれど、それは当時の医学では直せるかどうか、世界中の医者が集まっても微妙だといえるような、境界線上にあった。それに加えて、これは後で説明するけれど、あることで社会全体がすぐに混乱の中に没した。そのせいで君の高価な延命を、脳死の議論を長年重ねて結論が出た上で、続けるかどうかを判断する、なんてことが出来る余裕はどこにもなかった」

心配機能の停止。その理由としての脳幹機能の損耗、大脳へのダメージ。古典的な人の死の定義の、肺と心臓に関しては完璧で、脳に關してだけがグレーゾーンだったというわけだ。

（じゃあ）

「見捨てられそうになったってわけだ。そもそも君が生存を望むかどうかとも分からなかったしね。意識は無いし、深層意識に干渉する技術なんてなかったんだ。だけど、僕は君の意識が戻るんじゃないかと思ってた」

（何故）

「脳の状態や、様々なことを鑑みてその確率が高いと――まあ、端的に言えば、勘だよ」

（……………）

「君は、だから今でもこうして生きてる。この、僕の研究施設でね」生き残ったということだけは、しっかりと理解できた。さらに色々聞き出そうとして、時子はひどい眠気に襲われていることに気

がついた。

（眠い……）

「久しぶりに話して、疲れたんだろう。今は眠るといい。なに、これまでの眠りよりはずっと短くなるはずさ。起きたらまた色々とお話しようじゃないか」

何もかもがどうでもよくなっていた。同時に、話をして、今がどういう状況であるのかを、そして過去が、自分の知っている色々な物がどうなっているのか、知ることが怖くなっていた。起きたばかりだというのに、彼女は逃げるように眠りに溶けた。

声を失った。目も耳も心肺も腕も、様々な物を失っていたが、最も印象的なのは声だった。目が覚めて声を失っていた。それが、まるで自分を別人にしまったかのように時子には感じられた。

色のない、音の薄い世界の中で、ぼんやりと浮かぶ意識として彼女はあった。

起きるたびに、少しずつ聞かされる様々な話。

今が五年後であること。自分の年齢が、本来ならば大学を卒業して一年半になるくらいだということ。

あの時のバスの事故が、世界的なニュースになったということ。未知の方法で、未知の存在が、バスを襲撃したということ。死傷者が多数出たということ。時子を含めた数名だけが生き残ったということ。

生き残りに、朝倉秋人は含まれていないということ。

襲撃犯が複数名であること・超絶的な技術を有する集団であったということ・バスに続いて世界の様々な場所に散発的に現れいくらかの犠牲を追加していったということ。

その内、襲撃犯は人数を増やしていった。最初の事件から一年以上が経ち彼らは数十名の集団にまで成長していた。国際的に危険因子として広く認知された。

要求。「我々に干渉するな」各国の反発。テロリスト呼ばわり。相互理解の姿勢。一部国家、ないしコミュニティの、彼らへの接触・進んだ技術目的・先進国、主要国への反発を持った国々。第三世界の彼らへの歩み寄り。

国際緊張。彼らといくつかの国々とが接触。

彼ら——技術の一部を公開、自分達が現れた理由を説明。その上で穏やかな服従を世界に要求。大幅な理解の前進、しかしそれと同じだけの反感。

そして、命名。

アグリエーサル
彼らは、侵略者達と呼ばれることに。
アスィエーンニイ・アグリエーサル
秋の侵略者。

「五年前の時点では、彼らの持つ技術はほとんどオカルト扱いだった。物好きな雑誌が特集を組んでいたよ。ただ、一年後にはそれが現今の人類を凌駕するれっきとした科学技術だとほとんどの人が思うようになっていた」

研究者らしき男——自分では真貝と名乗った——は話好きのようだった。口調に詰まるようなところはなく、快調に話し進めていく。訊かずとも答え、いらぬことを言って反感をかうタイプのように時子には思えた。

「いやほんとに、人類がもし現時点で相対理論だの量子力学だの、その統一だのって所までいってなかったら、ずっとオカルト扱いのままだったろうね。それほどに彼らの持つ技術と知識は、凄かったんだ。僕も最初に見聞きした時は、SFじゃないかって腹を抱えて笑ったもんさ」

そこまでを一気に彼女の頭に流し込んで、唐突に音声絵に化けた。人差し指を立てたイラストチックなマークが情報として送られてくる。どうやら、話好きの上に凝り性のようだった。

「時空だ」

キーワード。人差し指の上に光る文字でspace timeと表示される。さらに画像がスライドし、丸い地球の画像、電磁気学の計算式と思しきもの、重力と光についてのイラスト、とても理解できそうにない様々な論文のタイトル、そういったものがばらばらと撒かれた。

時子は数日の間に、この機械を介したデータのコミュニケーション

ヨンの方法をしっかりと把握していた。要らない情報は、彼女の側からブロックしたり排斥したりできるようになっている。しかし彼女は敢えてそのままにしていた。

「空間と時間の四つ、そして我々には感知できない余剰次元を含めた全て。彼ら侵略者と呼ばれるものたちの、これらに対する知識技術は特に優れていた。過去に一部の国と接触した際、彼らは自分達を『宇宙の個性』と呼んだんだ。意味は分かっているけどね」

わき道に逸れてしまったのだろう。こほん、と一つ咳をする――わざわざそのようなイメージのデータを作って寄こしたのだ――と、続きを語る。

「重力子なんてものは彼らにとってすでに既知の、自由に捉え操ることの出来るものだったし、その気になれば恒星間航行船だって作れることを彼らは証明した。彼らは人類の研究中の理論の続きをたんまりと持っていた」

イメージが花開く。統一理論へと到る道筋。マクロなスケールでの余剰次元の存在と、重力的干渉の方法。エネルギーの理論が乱舞し、素粒子の振る舞いが駆け抜けた。

「世界は仰天した。みんな庭先にUFOが落ちたような顔をしていた。研究者達は必死で――あるいは自分が生きている間には辿り着けないと思われていた領域にわくわくしながらデータを確認していた。すぐに全てが真実だと分かって、今度は、世界は沸騰した」

新聞、ネットニュース、完全なデータ画像や、写真を取り込んだものらしき画像が竜巻の内側のように舞い上がる。一瞬のことだが、大体の意味――中心的なイメージは掴むことができる。脳へと運ばれる情報は、完全な画像や音声やテキストに分かれているわけではないようだった。互いに分類分けされながらも、相互に変換できる質を持つ。

世界中が一度に三回分の産業革命を味わったような、賑わい・狂乱が溢れていた。四年前から損情報は渦を巻きながら量を増し、三

年前にピークを迎える。

そこからニユースはだんだんと色合いを変え始める。

「彼らの技術を理解できた人間は当然一握りだった。というか、今だってその全てを完全に理解しているわけじゃない。超超高性能なスーパーコンピュータが作られるようになって、むしろ機械の方がよく理解しているほどさ」

五年以上前からは想像できない発展。恐ろしいほどの能力を持ったコンピューター。量子コンピューターの意外な形での登場。

「充分以上に発達した科学は、魔法と区別がつかないどころかとてもない反感を買いかねない危険物だ。蒙昧な人間達は、自分が理解できない物を恐れる——理解できていないのだから恐れることが出来るかどうか分からない、ということに気がつかずね。無知の無知だよ」

時子は僅かに眉をひそめた——気分になった。彼——真貝は、気にしていないようだった。よくよく話が逸れるのは話好きの上に凝り性で且つペダンティックな気質があるからか。

「一部の地域は彼らとなるだけ平和的に共存しようとした。結果として、かなりの技術が流れ込んだ。それはすぐに世界中に広まったよ。科学は一足飛びに進歩し、僕らは見たことのない世界を見ることが出来た」

いくつか都市と思しき映像が流れた。積層建築、宙に浮く映像広告。二十世紀の子供が描いた二十一世紀の絵に近い。どこか悪趣味な、SF的發展。

続いて、荒廃した土地がその数倍の量も同時に示された。

「彼らは彼らの出自と目的を訊いた世界に対してこう答えた。自分達は君たちとは異なる可能性時間軸における未来で生活していた人類であり、時間移動の技術まで手に入れた時代の生まれだと。そしてその必然性から、過去へと転移し、新たに生成される時間軸を自らの生存域に収めるためにここに来た、ってね」

(……? 良く分からない)

「ま、その話はその内、詳しくね。とにかく、彼らは人類を根絶するエイリアンではなかった。恐らく人間であるらしいということが判明した。だからといって友好的な未来から来た便利なお友達でもなかった」

時子も知っている、昔のアニメのキャラクター、未来から来た気のいい動物型ロボットや、地球の少年と友情をかわした宇宙生物、タイムスリップして人類を救いに来たサイボーグなどが静止画像として表示され、その上に大きな赤い×印が付けられていく。ばつ、バツ、×。

「彼らは多くの、人類にはよく分からない行動をとった。バス襲撃もそうだし、その後も彼らはいくつも事件を起こした。国境も民族も宗教も関係なく、突然襲撃したり、かと思えば技術供与を行った。行動の繊細な意味は分からなかったけど、その目的は彼ら自身の言葉通りだったんだろうね」

(目的?)

「この時間——つまり僕らにとっての『世界』を、自分達の生活圏にしようってわけだ。思うに、各国への技術供与なんかは、自分達の時代に世界を近づける為の行為かもしれない。誰だって原始人の中に入ったからって原始的な生活をしたがることはないだろうし」
(そんな。勝手よ)

「そう。自然界でのニッチ争いは、いつでも誰でも勝手なものさ」
ニッチ——生態的地位。一つの種が利用する、まとまった環境要因を表す言葉。ある植物が存在し、そこにそれを食べる草食動物がいて、それを狙う動物が、更にその動物を狙う大型動物が。

同じような環境でも、ニッチはより細かなニッチへと分けられることがあるために、ほんの些細な環境の差によって同じような資源を利用する異なる生物同士が同じ場所に住むことはある。

しかし通常、同じ環境に同じ資源を必要とする二種以上の生物は共存しにくい。その場合、よりその環境に適した方の生物がそのニッチを占めることになる。

種の存続の中で収斂進化と適応放散を繰り返し、変異しながらニッチを奪い合う。

「人間は数千年で、地球のかなりの部分を生存可能範囲とした。快適な生活のために、植物も動物も細菌も操作した。『地球を大事に』自分達の生活環境をだ」

肉も草も喰らい、それだけでなく多大なエネルギーと資源を欲する種族。地球に満ちた種。

「人間は適応競争で勝利し続けているのさ。海でも陸でも川でも暮らせるし、他の生物をいのように追い出したり住まわせたり。彼ら未来人も同じことをしているのさ。自分達に良いように行動した結果が、争いであり技術提供だ」

荒野の画像——争いの結果。

「彼らの技術を理解しない一般の人々にとって彼らは不気味な悪魔でしかない。反発は世界中で起こった。わけの分からない侵略者を殺せ、その知識だけは頂いて、って。大きな混乱に陥ったよ。彼らには今の人類なんて適いつこないのだから止めておこうって国、手に入れた技術と人類の英知はそれを可能にするって国、侵略者と戦う前に人類同士どんぱちやらなくちゃならなかった」

（それで、どうなったの？ 侵略者は……）

「別に」

（？）

「どうにも。彼らは原理不明に増殖しつつ、好き勝手にやってるよ。かつての大国たちは皆共倒れだよ。僅かに侵略者に手を出したところは、徹底的に叩かれた。今ではもう、誰もが彼らを受け入れてる。便利な未来人様として、自分だけは教われないように祈りながら」

世界地図・ところどころ欠けがある陸地・見たことのない分割線——国という枠が、大きく変化した証。

「出来るだけ彼らの意向を汲みながら、形だけの抗議をしてみたりもする。これが今の人類の一般性さ」

＊

そんな、失った五年に関する話ばかりをしていたわけではない。むしろそういった話題は、時子にとつての本題の前置きだったり、箸休めだったりといった具合で聞かされた。

本題――。

真貝が時子を生かしておいた理由。

「端的に言おう。好奇心だ」

弁解や理解を求める調子を全く感じさせない擬似的な声。ただ、面白がるいつもの調子もない。

「君はバスの事件での数少ない生き残りだ。ほとんど死んでいると医者は判断したが僕はそれを信じなかった。侵略者達の行動の意味は良く分からない物ばかりで、僕としてはその狙われた先――被害者に興味を強く持った」

（つまり私に？）

「そうだ。狙われたものから狙いを割り出せると信じたのさ。ひどい賭けだったけど、こうして君は意識を復帰させた」

（悪いけど、心当たりなんてない）

「……それについては、仮設がある。だけど、それを確かめる為には、まず君の希望を聞かなきゃならない。僕の、好奇心以外のもう一つの願いにも関わるものだ」

（希望……どうしたいかってこと？）

「その通り」

過去が炸裂した。家族との食事、学校でのイベント、他愛ない買い物、そして、最も強く意識に焼け付いた顔。

「君の今の姿だ」

頭の中に投げ込まれた映像は、寒気として感じられるものだった。氷のハンマーで殴られたような、悪寒としての痛みが走る。

「できるだけ残そうとしたんだ」

白い、柔らかかそうな不思議な質感の素材で出来たベッドの上に仰

向けに転がっている。さすがに五年経っているためか、分かりやすく焦げていたり血が出ていたりはない。綺麗な物だった。

そう、綺麗な物。髪はなく、頭皮のあちこちが一目で人工物と分かる樹脂版に覆われている。両眼があるべき位置には包帯のような布が巻かれており、両頬は焼けた後に再生したのであろう、ピンク色のつやつやした皮膚が歪に巻きついている。

首にはチューブがつながり、右腕は枯れ木のように細い。左腕はといえば、肩から先に何も存在せず、ただ脇の上辺りから少しだけ細い何かが突き出ている。

胴体には多くのわけの分らない機械がつながれ、どちらかといえば機械群のおまけとして体が生かされていることが分かる。

趣味の悪いオブジェ。奇怪な悪魔崇拜か何かの集団が拝みそうな形。

（これが私）

これが。変わり果てたのは時間だけではない。

「今の技術なら、君を充分に再生することが出来る。歩き食べ話すことが出来るように。皮膚も内臓も、今の医学は五年前とは別物だから」

再生。肉体の再構成。だが、それは一体どういった意味があるのか。

死。イメージが占有される。様々なものの死が、霧散が、無意味化が時子の体の中で一斉に声を上げていた。

（……は、死んだ）

「え？」

（私の大事な人は、死んだ）

どう語ればいいのかだろうか。首を捻えることもできない中で彼女はそう思った。彼との一年がもたらしたことの数々を、その価値を。

（今は、もう私の生きていた時代でもない）

五年間ですっかり変わった社会・肉体。人との関係性、自分を取り巻くシステムとの関係性、そして自分の身体。すべてが構造を変

化させ、彼女にとっての意味はそこに残っていない。

解体されたのだ。何もかも。

絶望的な存続。それだけが今の彼女には残されていた。

否定の意志を送ろうとした時、真貝はぞっとするようなことを言
った。

「もし、戻れるとしたなら？」

彼の狙い——意思と絡んだ善意や悪意が、その後続く言葉には
たっぷりと乗せられていた。

ミエーシチ
復讐。

復讐、報復、しっぺ返し、報い、贖い……

真貝は、単純なそれらを望んでいた。

そして、時子は再生した。自然な歪さから不自然なまでの直刃へと。

時子は自らの存続というものにさして価値を見出せなかった。世界を知れば知るほど、五年の月日を知識で埋めれば埋めるほどに、自分の世界など何処にもないということに気がついていた。

リアリティなんてどこにも無い。

バスでは多くの人が死んだ。彼女は、自分が生きていることとんでもない偶然でしかないことが分かっていた。

いきているかぎり、にんげんはみんな、しぬわけじゃないですか

どこかから、そんな声が聞こえたような気がして、彼女は不思議そうに首を振った。そう、皆、死ぬのだ。つまらない事故や病気で。戦争で。今生きているすべての人が、百五十年後には生きてはいない。

何故だろうか。

死が奪うものは、根こそぎだ。喪失に向かって突き進むのが、どうして人生と呼ばれるのだろうか。

朝倉秋人は死んだ。五年という歳月を失った。学生生活も就職活動も結婚も。珍しいことではないのかもしれないなかった。

「皆、失う」

彼女は、五年以上ぶりに声を発した。ほんのささやき声だったが、それに殴られたように、彼女は自身の声に、その内容に、ショックを受けた。大粒の涙が零れた。

皆、失っていくのだ。生きていく過程で、ある人は家族を失い、ある人は夢を諦める。同年代の友人が亡くなり、築き上げた信頼が崩れる。溜め込んだ貯金が一瞬でかき消され、信じていた国家が解体する。人間が生まれて以来、そんな喪失は無数にあった。体験しない者などいない。

意味はあるのか。

価値はあるのか。

生き続けることに。

声を上げた。悲鳴のような、天を衝く叫び声のような……

彼女は声を上げ続けた。五年分には足りなかったが、衝動が体を満たしていた。右腕を振り乱した。両足をばたつかせた。背中をまるめ、仰け反らせた。髪を振り乱した。濡れた瞳で、世界に溢れる光を一杯に取り込んだ。

彼女は生きていた。

＊

「香名？」

真貝は思わず高めの声を出してしまっていた。唐突な提案があったからだ。

「そう。香名。新しい名前があったほうがいいでしょう？」

驚く彼に対して、時子——香名は、けろりとした表情でそういった。体が再構築されてから一週間が経とうとしていた。

「いや、しかし」

「私が本当にあなたの要望通りのことをするなら、本名は都合が悪くはないはずよ。だって、行き先には『そのときの』私もいるはずじゃないはずよ。」

い」

「別に、それほどでもないと思うけどな。名前なんてお札の番号じゃないんだから、被っていったっていいものだし、地球規模で考えれば些細なことじゃないか」

「いいの。ねえ、私がそうしたいのよ。こうして生き返らせてもらってさ、五年も空白が空いているし、私にとってはなんだか自分が別人になったみたいに感じられるのよ」

真貝は、ふん、と一つ思慮深げに息を鳴らすと、彼女をいつもそうするようにじつくりと観察した。

時子Ⅱ香名はすっかり再生されていた。二本の足で立ち、長めの髪を揺らし、知性を宿した瞳で彼を見つめ、声を発している。細い全体像は相変わらずだが、そこに病的な影はない。血色もよく、綺麗な肌が眩しかった。

「本当に、君はなんだか別人になったようにこちらにも感じられるよ。まあ、いいんじゃないかな、君がそれでいいなら」

「ええ、私は進んでそうしたいの」

「なら僕も今後はちゃんとそう呼ぶよ」

「有難う」

彼女は右手を差し出した。彼はそれを握り返そうと手を差し出した。新たな門出の握手と言うわけだ。が、彼が手を出すと彼女は悪戯っぽく笑って右手を引っ込めた。

次の瞬間、彼の手の平に、柔らかい感触が重ねられていた。人の手の感触。彼は香名を見たが、その右手は引っ込められ、左は肩から何も生えていない。ほんの少し残っていた出っ張り、彼女の要望に従って切除し、香名の左腕は綺麗になくなっている。

真貝は、薄く笑みを浮かべた。それは成功を噛み締める笑みだった。

「もう左腕を使いこなしているのか？ 予想より随分早いな」

「だって、そうしなきゃ私はいつまでもここに——この時間にいることになるんでしょう」

言葉の後半は、沈んでいた。暗い色に侵食されている。

「君は、出来るだけ早く旅立ちたい？」

「ええ。あなただって、だれだって、そのうち死ぬわ」

真貝はしばらく黙した。香名は誰を責めるような言葉も吐いていなかった。かえってその方が真貝には深刻に感じられた。

「すまない。君に僕の望みを押し付けたのは――」

「いいえ。これは私の願いよ。私はここに、いたくない」

そこは自分の世界ではない。どの世界も同じく。ただ転々と、巡るしかない。

＊

「君は戻ることが出来る。五年前に。君の世界に」

真貝は――非常に優秀らしき、物理学・生物学・医学・天文学、そのスペシャリストは、時に「再生」を施す前にその条件を告げた。

そしてそれは、人類の新たな技術――時間への挑戦にも関連した話だった。

――私が、戻る？ 五年前に？

「アグリエーサル、侵略者の秘密だ。いいかい、良く聞いて」

それから彼が話したことは、馬鹿馬鹿しくも壮大で、おかしな話だった。ただ、技術とそれをもたらした侵略者の存在がそれを真面目な話だと保証する材料だった。

「川を思い浮かべてごらん」

山間の一つの流れが、一本の川として認識されている。その川は長く延び、続いていく。

上流は過去。下流は未来。時間は一方的に流れ、流れを離れて迂回したりすることは出来ない。

「タイムパラドックスという言葉は知っているかな」

過去へ戻って自分の親を殺したら。時間移動によって、如何なる

場合にも破綻してはならないはずの因果関係が破綻する、矛盾。

だが、侵略者の知恵は時間移動に関する大きな回答を人類にぶちまけた。

「時間移動とは、未来もしくは過去への移動のことだ。その内未来への移動は、原理だけなら既に昔から発見されていた。強い重力の傍では時間が、それ以外の場所に比べて遅れる。それを利用すればいい。新しい情報はすべての未来への移動の可能性を知らせてくれたが、それを検討したところ、未来への時間移動はパラドックスを起こさないことが判明している」

それは何となく時子にも分かった。

「では問題は過去だ。親殺しの話は有名だよな」

自分の存在の原因を、その存在する自分が消す。消す行為自体が消す厚意によって消されるという矛盾。

しかし、それは実は矛盾ですらなかった。

「可能性時間軸群」

それが、キーワード。

「時間は分岐するんだ。僕らにとって宇宙は唯一無二だけど、可能性時間という観点からすれば、分岐していく川筋の一つに過ぎない」

侵略者の優れた観測技術・それがもたらした時間の秘密、世界の秘密、宇宙の秘密。

「過去へとタイムスリップした場合、本来の時間軸にはなかったことが起きるわけだ。存在しなかった人物が現れるからね。すると、そこで新しい時間軸が生まれる。世界が分岐するんだ」

川の中ほどにあった水か、掬い上げられて上流に注がれる。すると、そこから新たな流れが出来、同じだけの幅を持った新たな川が出来上がる。

「分岐以前の時間も過去の存在もまったく同一であり共有しているが、ある地点からは二つの世界はよく似た全くの別物になるんだ」

過去に戻って親を殺せば、世界は「元の世界・自分が生まれて育

ってタイムワープした世界」と、「分岐した世界・何者か別の時間軸からタイムワープして来訪し、ある夫婦を殺害した（彼らの生殖の可能性を奪った）世界」に分かれる。分かれて、そのまま進む。何もパラドックスは起きない。因果関係は保たれる。A世界の両親は殺されていないし、B世界の両親はA世界の両親とは別物だ。

「時間を移動すれば移動するだけ世界は分岐する」

侵略者は時間移動を行うことが出来た。そして、別の時間軸から我々の住む時間軸へと移動してきた――。

――じゃあ、私たちの世界は。

「既に分岐した物だ。もともとの人類の歴史がどうなっていたのか、もうこの世界では分からない。では、もともとの人類の歴史とは――？」

――侵略者達……

簡単なことだった。もともと時間移動を生み出すまでに発展した人類の本来の歴史があった。時間移動技術が生まれ、そしてある何人かの人間が別の時間軸へと生存範囲を広げようと考えた。生物の本能に則って。

そして、彼らが過去に――まだ時間移動なんて夢の話である二十一世紀初頭に――移動してきたことで、時間が分岐した。突然の侵略者に蹂躪され発展する人類が存在する宇宙が出来上がった。

「時間移動して来訪したものの影響が大きければ大きいほどに宇宙は別物になる。川筋は大きく別方向へと向かう。影響が少なければ川は元の流れと酷似した方向に、極めて近い位置を通って流れる。時間移動技術を持つ人間の移動は、大きな影響を与えることが分かっている」

つまり、侵略者がやってきた日、バスを襲われた瞬間に、時子自身も分岐していたのだ。本来の人類の歴史――時子はいつもと変わりになく過ごし、もしかしたら彼と結婚でもして暮らしていた。その未来と、こうして五年間眠り続ける未来とが分岐したのだ。

「君は、才能がある。時間移動の才能が」

真貝は決定的に冷静で冷徹だった。

「君を再生させる条件は、時間移動だ。君自身に時間移動の機能を使用してもらうことだ」

＊

時間移動の、最も重要なシステムは、「検索」である。

移動先の時間軸がどれか、そしてその時間軸のどの部分に移動するか。それは、恐ろしいほど困難な作業だった。広大で茫漠とした時間軸空間のなから一点を探す神業。

時空を歪めて移動すること自体は、発達した技術にしてみれば容易なことだった。ただ、その検索技術のみは、どんなコンピュータでも不可能だった。

それを変えたのは、人の生理的認知能力だった。あらゆる粒子が一つの可能性時間軸——膜宇宙にくっついて離れないが、重力子だけは別の膜宇宙へと飛ぶことが出来る。

それと同じに、人の生理的認知能力の一部は、過去の時間軸を正確に探し当てることが出来る。実用可能なほどの認知能力は、ほんの僅かな人間にしかないものの……

そして、香名にはそれがあった。力。

侵略者達は、もしかしたらそれを狙っていたのかもしれない——真貝の仮説。

何にしろ、貴重な存在。香名の特別さを知った真貝は、覚醒の可能性にかけて彼女を生命維持し続けることを選んだ。

そして、成功。再生と改造。一つの時間を生きる人から、複数の時間軸をわたる放浪者へ。

香名の生理的認知能力。ある限定された条件の下で、別の時間・別の時間軸、その一点を検索できる。

条件——季節。

秋。それが、彼女の認知できるすべての時間。

「ぼくはちょっと、許せないんだ」

静かながら、迫力の籠った声だった。

「彼ら侵略者は、この時間軸を分岐させてしまった。そのお陰で僕は本来の歴史を知らない。人類は彼らにかしづく奴隷だ。君には、彼らを別の時間軸で待ち構えて、人類の本来の歴史を出来るだけ壊さないように、守って欲しいんだ。侵略者を撃退し、川の流れを元の川に沿うようにして欲しい」

侵略者は、人類にとつてとんでもない悪魔であり、真貝にとつても歴史を歪めた敵であるようだった。そして、時子・香名にしてみれば、すべてを奪った仇でしかない。

真貝は、彼女に「復讐」を頼み込んだ。侵略者への攻撃を。

「この時代では駄目なの？」

自分の体の機能をあれこれ確認しながら、香名は研究施設の一室でそう訊いた。

向かい合ってコーヒを啜る男、真貝は溜息でそれに答えた。

「侵略者は凄い勢いで増えてしまっただけ。どうやら生殖に関しても彼らは現今人類とは別物らしい。とにかく、相手に出来る数じゃないんだ。そもそも、彼らを今殺しつくしても、変わりきってしまった時間世界は元には戻らない」

「それで、過去ってわけ」

「その通り。過去、それもあの侵略者達が襲ってくる少し前の時間に転移すれば、少ない数でやってくる彼らを倒すことが出来る。増える前に潰す、害虫駆除さ」

まるで架空のハエを潰すかのように、ぱちん、と手を叩いてみせ

る。

「君には多くの力が、その肉体の再生と共に与えられている。万能兵器である『ルカー^{左腕}』や、時間移動の為の装置、そしてエネルギー炉に、それらを扱う為の『人工知性』もね」

時間移動を行う、最先端兵器。それが今の彼女だった。

「訓練は完了した。君は、もう大体全部、分かっていると思うけど」

「私が時間移動することで与える時間軸全体への影響。それを考慮した移動先の時間。そこでいつ敵が時間移動してくるか——そのすべての計算は、人工知性が行うことでしょ？」

「そうだ。そしてそれだけでもなく——」

「私の力の全て。複雑な兵器も戦術プランも認識情報もその処理も、人間では到底不可能な膨大な処理を行える。独立した人工『知能』ではなく、私自身の一部として解け合わさるように神経系に設置された、私を補助する私」

「そう。人工知性——それが君を導いてくれる」

彼は立ち上がった。香名もそれに従うように立った。

どちらからと言うわけでもなく、歩き出した。部屋を出て、殺風景な中庭へと歩み出る。

庭の中央に立って、香名は意識を整えた。平坦な、しかし何処までも柔軟な心の準備。鏡のように景色を映す透明な湖面の如き集中。そして、完璧な準備状態から、「この世界ではない」方向に向かって意識を伸ばす。

見えない、触れない、空間制御によって隠されたどこかにあるエネルギー炉と、時間移動装置が唸りを上げる。

初めて、声がした。

『ハロー、お目覚め？』

それは香名自信の声だった。香名の声が、香名の頭の中でクリアに響いた。

「声が……」

呆然と呟く。その様子と言葉に、真貝はすぐに気がついた。目を

見開いて、驚きの声を上げる。

「人工知性だ——君が身体機能、すべての装備を含めたその体を今時間移動の為に『起動』させたことで、君の中に入れ込んだ補助知性が一つの形を取ったんだ」

「人工知性が？」

「補助知性である人工知性は、AIではない。『全く独立しない知性』なんだ。元となる人物知性を苗床に根付き、その補助をする、あくまで本人とは別物であり続けながら完全に本人の知性に依存して存続する知性。その概念的形態は、それを組み込まれた人間によって異なる——頭の中に膨大なビジュアルが流れる人間も居れば、自分の周囲に自分だけが見える賢い小人や妖精が現れることもある。君の場合は——」

『もう一人の私』

「——」

驚きと共に、香名はある衝動が火を吹き、体の奥でうずうずしていることを感じた。

おかしさ。腹のそこから拳で突き上げるような可笑しさが——笑いとなってほとばしった。頬と脇腹の肉が痙攣した。

（私は、どこにもいないのに）

彼女に真貝が命じたのは、過去へ戻って侵略者達の侵略を止めることだ。だが、過去に彼女が飛んだ時点で、そこから先の未来はまた分岐する。侵略者達の来訪によって人類の歴史がねじ曲がったのと同じに。香名に出来るのは、侵略者を倒し、なるべく自分が歴史に影響を与えないように身を隠すことだけだ。

つまり、どう上手くいこうとも、時間を過去に戻った時点で、香名はもうもとの時間には戻れない。侵略者達はどうか知らないが、真貝達人類の科学による時間移動技術は、まだほとんど分岐していない過去に飛ぶことしか出来ない。

永遠の一人旅、そのための片道切符という訳だ。だが、香名はそれでも良かった。

復讐が果たせる。

そして、過去には秋人がいる。

どの道分岐してしまうのだから、そこにいる秋人は、香名の記憶の秋人とは別物だ。それでも、この五年後の世界にも居場所は無い。だから香名は真貝の提案に乗った。侵略者を殺しに過去に行くことを承諾した。

（故郷たる時間軸を離れて、二度と帰れはしない。そしてその故郷には、もう私の大切な何かは残ってはいない）

どこにもいない自分。

（それなのに、私に埋め込まれた人工知性は、私のドッペルゲンガ
ん）

『そう。私は、あなたのそっくりさん
ドッペルゲンガー』

人工知性の声が調子を合わせて響いた。

「皮肉ね」

『皮肉よ』

世界でたった二人の放浪者。時間軸の間を飛び漂う衛星であり、
それぞれの時間軸の中を二人して歩くお互いの同伴者。
スフートニク

しばし、彼女は本当の意味での新しい自分を感じ続けた。以前までの自分が――秋人と共に消えたことを噛み締めるようにして。

そして、出立。

すべての装置は正常に作動した。

「すべては徒労かもしれない。間違いかもしれない」

真貝は罪科の告白めいた言葉を口にした。

「君が一度目の過去で防衛に失敗し、二つ目の、ほとんど前と同じ過去に飛べば、リトライはきくけれど、その分侵略の危機に晒される時間軸が一つ『増える』ことになる。本当に正しいことか分からないんだ」

分岐する宇宙。時間を移動すればするだけ数が増える。増えた宇宙のすべてが幸福になるわけではない。

「でも……隷属は、みじめだ。時間を移動して支配を広げる人間が現れた以上、過去って時間はただの化石資源のように隷属させられ、使い棄てられる。それも無限にだ！」

一つの宇宙で足らなければまた過去へ。分岐した宇宙を支配して、一杯になればまた過去へ。侵略者がそこまでやるかは分からない。だが、可能であるということは、いつか誰かがやるということだ。「頼む、一つでいい、不当な弾圧のない、それでいて未来に侵略者を生み出さない時間軸を――」

声が途切れていく。香名は初めて、時間から逸れようとしていた。

秋が、意識を満たす。懐かしくもあり、何度も味わった物でもある、秋。

体内に格納した装置が、意識によって確認された秋をその目標として設定する。数値化、量化、分析、計算・修正・計算・修正……。過去の秋。分岐してしまった現在とは別たれた、別の三次元的膜^{ワールド}宇宙。

激しい力。空間から時間を潰してしまうほどの。世界が線に置き換わるイメージが脳裏に膨れ上がり、そして瞬間的に弾ける。線が切れ、たわみ、絡まり、どんどん加速しながら置き換わっていく。

秋へ、秋へ、秋へ……

＊

人工知性はハルと名づけられた。香名が、昔うたた寝しながら見たSF映画の何かの名前がそれだったのだ。良くは憶えていないが、何となくお似合いな気がして、即決だった。

香名は秋を強く感じる事が出来た。自分の時間軸のだけではない、い、過去の秋でさえも。その認知能力は、人間のものでありながら極めて珍しい強い物だった。

遺伝的形質と、後天的な経験によって芽生える、季節を手掛かりにした時空認知能力。それが香名の特別さだった。真貝はそこに目をつけて彼女を保護し、力を与えたのだ。

『目標時間座標を割り出たわ』

時間移動に入り、何処の時間軸でもない、時間軸を見渡せる空間――ある意味での、上位時空（メタ時空）に漂い浮かび、『時間移動のための時間（メタ時間）』の中でハルは独り言のように言葉を流し続ける。

『私達が時間移動を行うことで、移動先の時間軸には変化が生じる。敵侵略者達が本来訪れる時間はあなたが大学一年の秋。我々の時間移動の影響を加味した彼らの来訪時間は、計算の結果その一年前と考えらる』

川の上流に水滴が落ちたことによって、川の長さやうねりに変化が起きる。些細な変化でも、変化地点に近い場所では影響力が強く働く。一年後に来るはずの侵略者が、一年後に来る。

「一年前に……」

あのバスでの事件から一年前。秋。それは、彼とであった時間だ。つまり、何一つ「時子」を知らない彼の元にいくことになる。

『ルールを説明するわね』

「ルール？」

『この戦いのルール。時間移動やあなたの内部に潜む兵器に関して施された禁止事項や注意事項なんかがいくつかあるのよ』

「続けて」

はるか過去から伸びる一つの光る川。一つの宇宙の歴史が、真っ直ぐに伸びている。途中からそれは二股に分かれていた。現実からは程遠い、壮大でありながら全く夢のような光景を前にしながら香名は冷静に声に集中した。

『まずは、タイムリミット。私も、そして内臓武装も時間移動も、全て同じ一つのエネルギー炉から力を得て動く。基本的にあなたのすべての装備は自己修復が可能だけど、全て格納空間に隠した物質

とエネルギーによって可能になっている。つまり、戦いには制限がある』

「使い切れれば終わりってわけ」

『戦いの成功率は低い。様々なことを考えて、希望的に見積もっても、五年続けられればいいほうだと思っておいて』

五年。それが長いのか短いのか、香名にはあまり分からなかった。『次に、作戦の目的と実際の方法。私達は、侵略者達に過去の時間を荒らさせず、必要に応じて殲滅することによってなるべく時空改変の影響の少ない未来を残すことにある』

「ええ」

『そのために、私達は侵略者達よりも少しだけ過去に遡って、そこで彼らを迎え撃つ。敵の目標は、既に分かっている』

「秋人を含めた、何人かの命」

『目的は不明だけど、敵は秋人を殺した後に何度もあのバスのような襲撃を行っている。敵の時間移動を察知して、防衛に当たるのが私達の最も大事な行動』

戦いの為の装備が、彼女には内蔵———というか、時間移動の為の空間への干渉能力を応用した、『隠された空間』の生成により、その中に収められている。

『そして、その過去の時間での私達の行動は、勿論私たち自身が歴史を大きく捻じ曲げることにも繋がる』

侵略者との本質的な違いは少ないのかもしれない———脳裏に、不気味な思いが膨れる。

『時間移動のことや、未来的な技術、私達の行動の思想目的の詳細、過去の時間において自分が誰であったのか———その全て、私達は他人に話してはいけないし記録として残してもならない。これは、各装備とあなたの脳に直接禁則事項としてプロテクトがなされている』

真貝の努力の賜物・香名を侵略者にしないための。

ふ、っと呆れたように香名は息を吐いた。肩に重石が乗せられすぎて、関節が外れてしまったかのような何か馬鹿馬鹿しい感じがし

た。

「つまり私は、助ける対象に自分が未来から来た守護者だって伝えることも出来なければ、感謝されることもないかもしれない、協力には誰にも仰げない、おまけに時間制限つきで、全て上手くいったとしても元の時間が戻ってくるわけではなく、どこにも帰れないってわけね」

『ええ、その通り』

「確認したいのだけど、すべてが成功した場合その後はどうすればいいのかしら」

『自己凍結の為の機能があなたの身体及びすべての装備に付加されている。自身の機能を眠らせて凍らせて、未来、自然と人類が時間移動を生み出すまでになればあなたの与える影響は極小にまでなるから、その時点で起きればいい。運がよければそこで物資とエネルギーの補給を受けて、生き続けられるかも知れない』

エネルギー枯渇のタイムリミット。それは、単に時間移動や兵装の運用が不可能になるというだけではない。彼女の体は半分以上機械仕掛け、人工臓器に人工皮膚、そして兵装使用のための機械的補強で一杯である。食事では補えない部分が多いのだ。

「運がよければ冬眠して今度は未来へ、ってことね。他には？」

『大まかなことは、これで全て』

笑い出したい気分だった。過去へと飛んで、そこで真実を話すことは出来ない。苦痛に満ちた戦いに協力するものはいない、させてはいけない。誰も知らないうちに終わらせるのが最も望ましい。失敗すれば、また過去へと――前よりもほんの少しだけ遠い、分岐する前の過去へと跳んでやり直す。

未来からやってくるにしても、ヒーローではない。映画の中のサイボーグのような、華々しさはない。

ややこしいことだが、香名は自分の行うべきサイクルを理解した。

過去へと戻る・時間が分岐する。そこで敵を迎え撃つ。失敗する。

また過去へと戻る。香名の時間移動装置は分岐した後の宇宙から一つを選び出すことは出来ない。そのため、前に過去に戻ったその時間よりも少しだけ更に過去へと戻る。また敵を迎え撃つ。この繰り返しだ。

つまり、負けるたびにじりじりと過去へと遡りつつ戦い続けるのだ。一度過去へ戻るたびに宇宙は分岐し、『まだ自分と戦ったことのない同じ敵』が同じ位の時間にやってくる。そして、再戦するのだ。

「長い旅になりそうね」

『ええ』

私は、放浪するしかないだけなのに。

朝倉秋人に、会いたいだけなのに。

やがて、スプートニクは、懐かしい六年前——香名の体感では一

年と少し前の、彼と初めて出会った時間へと潜り込んでいった。

一度目の時間移動。時子と秋人が高校三年時の秋、二人が出会うはずであった日より二日前へと到着。初めての警戒。

人工知性ハルが強い時空震を感知。侵略者の来訪。日本へと直行してくる。狙いが秋人であることが判明。

侵略者のうち二名に接触——無残にも敗北する。実践はこれが始めてであり、勝利は遠く霞んでいた。事故修復を急ぎつつも、敵を追跡。秋人は時子と共に電車で都市部へ移動中。侵略者の強襲——バスでの事件を髣髴とさせる結果に。死者多数。秋人及び時子両名が完全に死亡。その時点で香名の失敗が確定。

更なる時間移動へ。

時間移動の繰り返し。せめて未来に、分岐した世界の一つを正確に検索して飛べるならば——香名の思い。時間移動を繰り返して自身を増やせば戦力は飛躍的に高まる。

それを阻む制約、未熟な技術、香名の時間移動装置の機能制限。分岐していない過去へと飛ぶことしか出来ない代物。

繰り返し返される敗北。三度目の挑戦からは、秋人に直接接触する。

「ハロー、お目覚め？」

君は？

誰？

ええと、

こんなところで寝てしまった

ああ、その、おはよう……

海岸での出会いが、最も設定しやすかった。繰り返し観察した秋人の行動——この時期、彼はよくよく海岸へと足を運ぶ。そして、香名との出会いを、彼はほとんど拒まない。多くの場合はすぐに打ち解けてしまう。

何度も繰り返す。何度でも。

——僕は、秋から逃げている。

——私もよ……

秋人と出会い、その傍らに控えて敵を待ち受ける。敵に出し抜かれない為の行動。その代償——彼は、香名が接触した時間軸では時子と接触することがない。

無数の朝倉秋人が、本来の出会いをすり抜ける。時子は一人で海岸を歩き、そのまま家へと帰る。何か、ある重要さを克服しないままに。

一度の時間に留まる期間・平均約二ヶ月・最長半年・最短三日間。期間に関わらず、すべてが敗北の時間軸。経験をつみ、敵の情報が溜まっていく。敵は毎回『初めて』その過去の時間へと飛んでくる。繰り返すほどに有利になっていく——が、それぞれの世界のランダムさによって、不利にもなる。結果、惨敗惜敗を繰り返すことに。

敵の数——最大で五人まで確認。その一人ひとりの力、外見、癖、声、徐々に見抜いていく。代わりに築かれていく、保護すべき対象の死体。秋人。

何故か、敵はどの時間軸でも最初に秋人を狙う。そのため、香名も秋人に張り付かなければならなくなる。

作戦初期——希望的。目的の達成と、僅かに得られる、偽者であれ輝かしい再会の喜び。

中期——多くの敗走。負けるたびに、次の世界に賭けるためにその時間軸を逃げ出して自己修復を済ませる。何もかも置き去りにする・分岐した世界がまた一つ、侵略者の元に下る。

後期・現在まで——乾きつつ最適化される行動。彼との出会い、時間の使い方、敵との接触、戦闘行動、磨き上げられ先鋭化していく。惜しい敗北が増える。

その分、意志がくすむ。錆び付く。数十の世界を増やし、結局守りきれなかったという自責。つまりは、それだけの数の朝倉秋人が亡き者にされたという認識。

自分こそ、真に侵略者ではないか——根本的な疑問。時既に遅し。

＊

現在。

霧散していく熱波の中で、香名はある哀れな人魚の話を思い出していた。お手本のような一目ぼれと、一途な行動によって様々な物を失い、最後には泡と消えるどうしようもない頑固者の話。

盾にしていた左腕^{ルカー}を軽く振って熱を逃がすと、彼女は軽く顔を上げて上のほうを見た。思ったとおり、そこには大柄な男が浮かんでいる。

「一人目」

呟く。既に何度も戦ったことのある相手だった。侵略者達はどれも手強い。最初に相手にするのが誰かは乱数が多すぎて特定しにくいことから、こうした不意の遭遇も珍しくはなかった。

すぐ隣では、一緒に熱から守られた秋人が目を丸くしていた。何が起こったのか、一ミクロンも了承していませんといった感じ。

香名の力——見えない左腕^{ルカー}。pyka。空間操作によって隠された大量の微小な万能機械群。香名の操作により、受け取った信号で数パターンに微小機械が変形・極めて単純ともいえる構造の一つ一つの粒。更に超超硬度。集合させ密集させることで瞬時に腕やブレードなどの固体へと変化が可能。その際は白銀の物体として視認可能。

相手へと接近、同時に左腕の部分に現れた銀の刃——香名の背丈

と同じほどもある、薄く細いルカーの剣を振るう。敵の大男は、顔面にまでついた全身の筋肉を振るわせた。またも熱線が現れたことを、ハルが感知。微細なデータの確認、頭の中で一瞬すらかけずに行われる。剣が熱を弾く。同時に敵が高度を下げて逃げる。熾烈な空中戦。

敵が叫んだ。獣のような声が敵の足元の海面すら揺らす。今度は幾分一つ一つの熱量の低い、薄い熱線が無数に放たれた。全て香名に足元から襲い掛かる。まるで熱の散弾だった。

ルカーの更なる力の発揮。

ある程度密度が高ければ、微細機械群を固体化させずとも、一つ一つを複数方向に刃を持つ形体へと変えその場で振動させることで、不可視の盾・剣とすることが出来る。細かで力持つ振動が、それぞれ互いの隙間をカバーするのだ。

応用も可能。微細機械の集め方、動かし方は自由。失った左腕の感覚をフルに利用することで操られる万能兵器。

そしてそのルカーを操る手段でもあり、浮かんでいることが好きらしい侵略者に対抗する為の手段でもある空間制御装置。香名の体の各所に埋め込まれたデバイス。時間移動の為の空間の歪みの発生源ともなる。

ルカーが腕から散った。光持つ雪のような儂い輝きを残して、香名の長大な「左手」が消えて腕のない肩が覗く。

彼女を覆うようにルカーの群れが移動。振動して、微かな輝きを放つ。熱の嵐がそのシールドを破れずに通り過ぎた。

敵は、滑稽なことにひどく驚いた顔をしていた。香名の倍は歳をとっていきそうな顔が、歪んでいる。すぐに激しい怒りがその歪みを質の違う歪みに変える。

「なん、だあああ？ お前、は、お前は・お前は・お前は・オマエ オマエ！」

「あら、憶えてない？ 会うのはこれで三十度目よ」

皮肉、嫌味としての冗談。敵にとっては毎回、初対面の相手とし

て香名は映る。香名自身が増やした時間軸に応じて、敵の存在が分岐している為だった。

「あああ!？ お前、なんでえええ、俺、は」

「知ってるわ。『クラスナター』でしょう。初めて名乗られたのは『何度目』のことだったかしら」

彼女の内側で、ハルが香名のほとんど無意識的な求めに応じてデータを意識に上らせる。

『^赤クラスナター。敵の一人で、始めに転移してくる確率が六割以上。敵は転移してすぐに秋人へと向かうことが分かっているけれど、その中でも最も直線的に襲ってくる相手。自身を中心とした広範囲の分子が持つエネルギーを、収束・操作する。運動エネルギーを手当たり次第に変換して打ち出してくる、熱の導き手。攻撃の際、皮膚の一部が赤く染まる。熱制御の生体機能の存在の為と推測される。ただの人間ではない、明らかな戦闘用の個体——ある種香名と同類とも言えるかもしれない。紅葉を象徴する者にして、秋の怒りを表す怒人』

その怒人が吼える。圧倒的な咆哮。ダイナマイトを握りつぶして爆発させるが如き、獣を超えた叫び。秋の怒り。停滞しがちな季節に詰まった憤懣・憤激。

クラスナターが加速した。香名へと突っ込む。

急激に近寄られて、内心でじわりと滲む恐怖——三十度目の戦闘であっても消えない物——を押し殺し、ルカーを操作する。二本の左腕をイメージし、即座に形にする。即興で作った、半ば出来の悪い翼のような形のそれが、敵を受け止める。

「ご・お・お・お・お・お・お・お・お・お・お・お・」

気味の悪い、怒りそのものの形相と声が至近にまで達する。クラスナターは自らの両腕に熱を凝集させていた。立て続けに両拳を叩きつける。その全てをかううじてルカーの腕が受ける。

両腕を組み、ハンマーのように打ちおろす敵。堪えきれずに、香名は吹き飛ばされた。

かろうじて空中で制止するが、胸の内側から太ももにまで衝撃が残っていた。肩の辺りの皮膚が余波を受けてひどい火傷になっていた。

ぎらぎらとした目。敵が、怒りの更なる捌け口を求めて、追撃を行う為に香名を視界に捕らえて両手に力を込めた。またもロケットのように突進してこようとして、途端にその動きが鈍る。

空中を、一本の線が走っていた。香名のセンサーしか捉えられない、凄まじく細いワイヤー。ルカーの一部で、攻撃を受けながら作ったものだった。微細機械が列を作って振動し、互いに引き寄せ合いつつ反発し、あたかも一本のワイヤーのようなものを形成している。

それが、クラスナターの太い右腿・左の二の腕・腰・首の四箇所巻きついている。

遠慮なく引く張った。空間操作で出来るだけ素早く力強く。

血が空中で火花のように派手に散った。切断するつもりだったが、敵は全身に熱をまとって振りほどいた。しかし既に致命打となっている。ワイヤーから逃れたその隙について、香名はいくつかのルカーの集団を形成していた。小指の先のような形にルカーを集めて固形化する。それをすぐさま撃ち出すように操り、敵へと放った。

見開かれたクラスナターの瞳をルカーの銀の弾丸が貫く。続けて頭がはじけた。立て続けの着弾。

海へと落ちる巨体を見もせず、香名は別の方向を向いた。

「二人目」

冷たい眩きが、更に重ねられる。

ルカーとは異なる銀色が、飛来した。刺身包丁のような形。実際、その切れ味は包丁なんてもものとは比較にならないことを、香名は知っていた。身をもって。

ルカーを固体ブレードにして弾く。軌道をそらされてその銀は海岸の舗装に突き刺さった。へたり込んだままの秋人がそれを見て眉

をひそめた。

それは、細長い刃のような形の『生き物』——秋の味覚、秋刀魚だった。

ひよろりとした、何かの冗談のように細い青年がいつの間にか海の上——香名から少し離れた位置に現れていた。

Halieujah
「ハレルヤ！」

幽霊か死人を思わせる瘦躯でありながら、声と、その声を発した口元にはその抜けた明るさが満ちていた。顔はいき過ぎた笑み——見るものが思わず戦慄することを禁じえないような笑顔——であり、少しも他の表情を浮かべない。笑顔の張り付いた男。

体中いたるところに秋刀魚が保持されている。まるでガンベルトと弾丸のように、全身にホルダー・その中に秋刀魚。

「仲間が死んだってのに嬉しそうね」

小声だったが、香名の言葉をそいつは聞き取ったようだった。距離を感じさせない元気な声が返ってくる。

「勿論悲しい。こんなことは想定外だ」

敵——更に笑みが深く濃くなる。

「だが喜ばしい！ なべてこの世は喜びに満ちているのだから！ 想定されたことは英知であり、出来なかったことは即ち試練だ。愛と希望に満ちている、喜ばしいことだ！」

溜息もつかずに、香名は無視した。

ハルの声。

『ピターニヤ。構造強化された秋刀魚を主な攻撃手段にする、秋の味覚の象徴者。速さと奇怪さが厄介な相手。わたし（人工知性）の行動予測が最も辛い、時間軸ごとの乱数が大きい敵。高度な感知能力も併せ持つと推測される。秋の喜びを表す、奇人にして喜人』

喜びに満ちた男が、優雅に両手を動かす。手品のように二匹の秋刀魚が手の平に現れる。更に動き、どんどんと手に握られる秋刀魚。「分かち合おうじゃないか」

言って、手を振った。

「お断りね」

即座に攻撃しようとしていたルカーで全身を覆う。不可視の盾をつくり、敵の放った秋刀魚から逃げる為に空中を出来るだけの速度で飛び退った。

耳障りな音が跳ね回る。魚ではなく、まるで日本刀がライフルで打ち出されたような攻撃。盾とぶつかり、甲高い音が連鎖していく。鋭さは日本刀よりも上で、上手くかわせなかった秋刀魚の何匹かがルカーの防御すら超えて香名を脅かした。

何箇所か浅く肌を切り裂かれる。一匹が割に深く脇腹に切れ込みを入れる。

顔をしかめつつ、香名はルカーの弾丸を立て続けに放った。相手の回避や防御のを包んでまとめて攻撃する。雨粒のように多数の弾丸が虚空に浮かび上がり、ピターニャに斜めに降り注ぐ。

それすらも、身に纏った秋刀魚で打ち払う。何かの装甲のように並べて体に巻きつけられた秋刀魚に弾丸が当たるように体を回転させつつ、ピターニャは香名に迫った。防御と同時の接近。懐に入られて、香名が焦りを感じる。

「喜びだ！」

まるでそれ自体が喜びだといわんばかりに、てかてかと光る秋刀魚を両手で振り回してくる。ルカーの刃で対抗するが、接近戦では敵が大きく秀でていた。押し切られる前に、香名はルカーで薄い盾――振動による固い空間のようなイメージ――を何枚か自分の前に作って後ろに大きく加速した。ピターニャもそれに追従しようとしたが、盾に阻まれる。突っ込んでくる敵はすぐに盾を突き破るが、数枚の盾が大いに時間を稼いでくれる。

続けてルカーを操作する。十本ほどのワイヤーを形成し、敵の動きを封じ込めるように振るう。逃げ場を奪い、死地へと誘う。

そのワイヤーを、小さな爆発が妨害した。横合いから飛んできた赤い何かがワイヤーの近くで破裂したのだ。見えないはずのワイヤーの阻害。

「三人目……」

疲労と焦りの滲んだ声が自然と漏れ出た。

追い詰めかけたピターニヤの足元、海中から水音と共に現れる影・深い皺が印象的な白髪の老人。今年で百二十歳だといわれても信じてしまいそうな見た目のそいつが海面から完全に脱して浮遊する。

『ツヴィトークー―秋の花々を元にした有機兵器を操る、侵略者の不気味人間。キク、コスモス、ダリア、キキョウ、様々な花を持つが、最もよく使うのは彼岸花。茎がタングステンよりも鋭く硬い、改造された彼岸花は、対象を狙って放たれ、突き刺さった後に爆発する。更に傷口に、爆発と共に散布する毒――彼岸花の本来持つアルカロイドを元に強化されたものを侵入させ、神経を侵す。秋の情景を象徴し、秋の哀しみを表す哀人』

おおおおおうう……

低い唸り声かと錯覚する。老人から放たれた、驚くべき泣き声。涙は一滴も流さず、しかし泣き声と分かってしまふ、哀切に満ちた声。

泣きながら、さっと両腕を広げる。その胸元から、大量の花弁が舞った。

「っ！」

警戒するが、ハルの分析結果には、特に異常な攻撃的な要素は無しと出ていた。それ自体が攻撃ではない。

（目くらまし）

単純ながら厄介なものだった。花卉は、攻撃性こそ無いものの、赤外線、電波、重力波、様々なサーチを阻害する機能を持っているらしかった。視認だけではなく、機械的な探査も遮られる。香名を取り巻く花の群れの中から、突然に秋刀魚と彼岸花が襲来する。予測出来ない、危険な攻撃。

操れるだけのルカーを全て防御に回す。それと共に花卉の嵐から抜け出す。その途中で更に浅い傷が増える。彼岸花の爆発で、左耳が音を捉えなくなった。

辺りを素早く見回す。前後に一人ずつ。前に秋刀魚男が、後ろに泣き虫の老人が浮かんでいる。

構わず前へと突進する。ルカーの攻撃を警戒してか、ピターニヤはその場で両手に秋刀魚を持ち、牽制するように控えめに香名へと振るった。

その秋刀魚に、香名は躊躇うことなく右腕を突き出した。人口皮膚と強化された内骨格をもつとはいえ、何の兵器も持たないある意味で生身の右腕。

空間制御による加速を最大限生かして、叩きつける。当然ざっくりと切り裂かれるが、逆に傷口がしっかりと秋刀魚を挟み込んだために敵の姿勢が崩れた。

何度と無く敗北した相手の一人。香名は吼えた。極めて人間的で、切実な叫び声だった。

背後から彼岸花が飛んできている。香名は叫びと共に、通常意識して操作のできる範囲を超えてルカーを操った。小さな香名の体のあちこちから、銀色の腕が無数に「生えた」。

(うううう！)

強烈な眩暈に似た感覚が彼女を襲った。十数本もの銀の腕が一斉にピターニヤを掴み、力技で振り回した。

香名とピターニヤの位置が入れ替わる。ピターニヤに突き刺さる凶悪な彼岸花。爆発はしなかった——咄嗟にツヴィトークが操ったのだと知れた。

すぐさま腕を切り逃げようとするピターニヤ。その背に思い切り刃を突き立てる。穴の開いた背中を見せながら、ピターニヤはふらふらと離れた。

「喜びだ……秋の苦痛さえも」

付けられた傷すら喜ぶ。異様な姿。

ううう、おおおおおううう！

静かな海の上で流れる騒がしい哀しさの表現。味方に攻撃を加えてしまった老人。

先の香名の銃弾の雨をお返しするかのよう、連続して彼岸花が飛んでくる。まるで古い時代の戦争のワンシーンだった。弧を描いて降ってくる矢の群れ。

全身に防御を張れば、攻撃の手がなくなる。敵が二人の状況では好ましくない。そう判断して、香名は一気にブレードを複数構成した。左腕のあったはずの場所に、いくつもつなげて、まるで翼のように複雑に折り重なったブレードの群隊を作り上げる。

あとは、それを制御することが問題だった。立て続けのルカの制御――脳を介した電子制御システムは、疲労と、その先に深刻な障害をもたらしかねない代物だった。

弾く、逸らす、斬り断つ、防ぐ。敵意のシャワーを掻い潜る。

頭が沸騰する。徐々に思考が熱に脅かされる。自分が叫んでいるのかどうか分からない。曖昧さの中で香名は誰かを呼んでいた。秋人かもしれない。或いはこの時間の自分かもしれない。クラスメート、親、昔の友達、大切にしていたペット、名前をつけて可愛がった猫のぬいぐるみ……記憶が錯綜した。

彼岸花の豪雨の中に紛れて、秋刀魚を抱えたピターニヤが現れた。ルカの制御で、戦闘の緊張と膨大な思考で、肉体の損傷で、その全てで崩れかけている香名に容赦なく秋刀魚を突き出した。

細く薄い腹に、秋刀魚が突き刺さった。血が溢れ、海へと落ちた。香名は薄く目を開いていた。淡々とした表情で、しかし涙を流し、腹に刺さった魚を壊れかけた右手で掴んだ。

刃の羽が、動きを止めたピターニヤを包み込んでいた。ゆっくりと、刺さる音と潰す音とその中間的な折れる音割れる音が断続的に響いた。

ぼろ布と化したピターニヤが、破片として海に棄てられる。

おおおおおおおうううう……！

老人の声。仲間を悼んでいるのかもしれない声。

その口に、秋刀魚が前触れ無しに突き刺さった。老人の目が一杯に開かれ、ぐると裏返って白目になった。

ピターニヤを潰した羽からいつの間にか伸びた二筋のワイヤー。ルカーの作り出したレールが、老人の喉に繋がっていた。

羽が消える。レールとなったワイヤーも同じく。老人がピターニヤの残骸の上に落ちて、すぐに沈んだ。

気を失わないように気をつけながら、香名は海岸へと降り立った。目の前に、驚きを通り越して声が出せない秋人が座り込んでいた。空虚な戦い。それが意識された。空虚な秋の、空虚な争い。

その彼の背後で、足音が響いた。二人分の足音。実際には「一人」の足音。

四つん這いになった年齢の分からない男が、人には出せない汚い擦れるような音を喉から発しながら、姿を見せた。

『ナシ^虫コーマヤ。改造された秋の虫、スズムシ・コオロギ・赤トンボを組み合わせて大量に扱う最低の敵。秋の生き物を象徴・秋の楽しみを表す、楽人』

顔を上げて、ナシコーマヤは笑った。両目は別々の方向を向いている。涎をたらしながら首を振って、度を越えた楽しさに浸っている。

その背中から、ざわざわと石油か何かのように小さな虫があふれ出した。

「四人目」

血の滲んだ、死にかけの声が掠れて消えた。

四人目との戦闘――それに、初めて勝利する。振りまいたルカーを発火させて虫を焼き払い、ついでに黒焦げになったナシコーマヤを海に棄てた。もはや、侵略者達の血と脂肪で潮の香りすら変わりがねないように思える、出会いの海。

一旦戦いを終えて、緊張が解かれる。敵は五人。二十九回分の過去が保証する事実は、後一人残っていることを確実と言ってもいいような確率で示して見せている。

いつの間にか彼女は海岸の舗装の上に横たわっていた。うつ伏せで切れ切れの息を吐いていることを自覚した時、香名は猛烈な疲労感と、ルカー制御の負荷に襲われた。自分の体の境界線の曖昧さ――とんでもない気持ちの悪さ。ひっくり返るような平衡感覚。

そのままどこか、わけの分らないところへと意識が打ち出されそうになったが、すんでの所で止まる。

香名の近くに、心肺さで塗りつぶされた秋人の顔があった。

「……………」

かけるべき言葉が見つからないのだろう、焦りと困惑も見取れた。彼が「大丈夫ですか?」と言いつ前に、彼女は全身の力をかき集めて立ち上がった。ハルが彼女にだけ聞こえる彼女の声で、身体チェックの異常項目を深刻度順に並べていく。まるででたらめな会計報告のよう。赤字、赤字、赤字。

「ここを離れましょう」

身を落ち着ける必要があった。まともに戦うだけの余力の残っていない体を。

「どこへ…………?」

香名には答えられなかった。偽装して契約したマンション？ 彼の自宅？ 懐かしい校舎？

香名は秋人の手を取った。軽快な、踊るような足取りを意識して、ようやく重々しく引きずるように歩き出すことが出来た。

敵はどこにいたって襲ってくる。殺すべき秋人のところ、そしてもしかすれば香名や時子もその対象かもしれない——どうしようもない考えが香名に認識され続ける。

「どこでもいい……どこでも」

ただ、一緒に少し、歩きたい。そう言おうとして、上手く発声できない事に愕然とした。言葉がもの凄まじい力で押さえつけられているのだ。脳裏で「ぱちん」と幻の音が鳴った。鍵のかかる音。

『言動ロックを確認。時間軸への与影響の不必要な増大を防ぐ為の遮断プログラム』

ハルの声——時間旅行に出かけるその出発の日に聞かされた『ルール』。

人類にとっての本来の歴史——つまり時間軸改変の影響のできるだけ少ない未来を残すという任。そのための制限。未来から来たことも、その目的も、科学技術の説明も、元の時間で何があったかも——『敵を倒し時間を保全する』上で最小限の影響以外は与えてはならないというルール。そのために施されているプロテクトが働いたのだ。

つまり、それはぎりぎりのライン。

秋人を守護する為に、共にいることは何とか許される。

だが、『香名が』好意を寄せる行動は、『時間を保全する』ための行動としては逸脱している。

プロテクトの発動。影響を少なくする為、『必要最小限』であらねばならない。求めず、打ち明けず、ただ敵から時間軸を守って消えることが理想。

笑いがこみ上げた。怒りと呪いの笑い。ああ、そうだった、私はとっくにどこにもいない放浪者だった——

「どう、したの？」

秋人が、覗き込んだ。

「泣きそうな顔をしてる」

的確な言葉に、香名は答えた。率直に答えようとして言葉が詰まった。ぱちん。

だから、正逆のことを口にした。

「別に・全く・全然・これっぽっちも。私は大丈夫」
シイヤーシチャ

幸せ・幸福シイヤーシチャ。何も不幸は無い、完璧で安定。

ぎゅっと、秋人を握った手が握り返された。

＊

雨が降り出した。

海から離れ、市街を抜け、街に平行して流れる広い川に差し掛かって、とうとう香名は手足を働かせることに失敗した。無様に転び、そのまま起き上がる気力も失った。

秋人は彼女を抱えて、近くの橋の下に入った。雨露だけをしのいで、途方に暮れた。

香名の体はぐったりと力を失っていた。自己修復中の作り物。生身の方が少ない身体が、大急ぎで復旧作業中だった。満足に寝転がることも出来ない。湿った草地の上で転がしておけば、勝手に死んでしまいそうだった。

秋人は彼女を抱えるようにして、何とか座らせた。橋の裏側、それを支える橋脚を背もたれにして、落ち着く。

やけくそのように雨が強くなっていた。川の流れも激しくなり、水の流れる音が暴力的に橋の裏に反響していた。

「寒いな……」

秋人は呟いた。ここ数日とは比較にならない寒さだった。雨に濡れたせいもあるが、それでも寒い。

もう、秋は終わりにかけている。そういう実感があった。立冬が迫

り、冬が背中に手をかけている。秋人にとっての、最後の『強く感じる秋』かも知れなかった。

（僕の中の秋は、もう）

吹き散らされた。秋の持つ恐ろしい停滞と虚無は、自分にもたれかかっている少女に打ち消されてしまっていた。

少女――香名と言う――。彼女の存在が、彼を変質させた。その内側に秘めた強い何かが。

だが、その彼女はわけの分からない何かと戦い、力を失って彼にもたれかかっている。一体何のための戦いか、どうしたらよいのか、彼には何一つ分からなかった。

間違いなく大事な存在――だというのに、隣の少女が、どこか「とんでもなく」遠いところから来て、「この世界に本来関係ない」戦いをしているような気がしていた。

「……よ」

香名の口から、何か言葉が零れた。驚いて秋人を見ると、彼女は薄らと目を開けて、何かを喋り始めていた。

必死に耳を傾ける。水音が荒れ狂う中、聞き漏らさないよう最大限の注意を声に向ける。

それは、何も内容の無い、どうだっていい話だった。空の色の話、人の気持ちの話、正しさの話……一方的に語られる、内容の統一感も関連性も何も無いばらばらな話の群れ。時間にそって次々零れるだけの、完全な雑談。

ほとんど意味のない言葉ばかりだった。秋人は真剣に耳を傾け続けた。

その内、それが全て音楽のように聞こえだした。意味のない音、意味の無い声の流れ続け、大きな一つの意味をおぼろげに浮かび上がらせる、まるでオーケストラ。

とてもあやふやで、わけの分からないイメージが浮かんでくる。雲の形の話が何か繰り返しを感じさせ、数学パズルの話が難解なものを表す。

秋人は相槌だけを打っていた。精一杯の真剣さを表すために。

言葉が音楽に、その音楽がイメージを作り出す。哀しげで、激しく、長い時間……そんなものが感じられる曲。伝えられないことがある、話せない想いがある、そんな曲。

一種幻想だといってもいい。なによりはつきりと感じられる幻想

——『人の声は音楽だ』。

一晩中鳴り響く音楽。彼にしか聞こえない旋律。

そうして夜が過ぎた。

＊

橋が吹き飛んだ。

強烈な熱と共に打ち出された彼岸花と秋刀魚による攻撃だった。

香名はルカーで自分と秋人を囲み、破片のすべてから守った。その上で、ずっと立ち上がった。ぐらついていた意識も体も、何とか戦えるまでになっていた。

秋人が彼女を見上げていた。『何も分かっていない』顔。それと同時に、『分かっていないけれど感じている』顔。

少なくとも——今回のこの秋人との出会いや会話は無駄ではなかったかもしれないと、彼女は感じた。

飛び立つ。五人目との戦いへと。

『オーシニ——秋そのものを生理認知して時間移動を行い、また秋自体を武器にする秋の権化。秋そのものを象徴する。四季の秋を現す、侵略者』

高みから橋を崩したのは、穏やかな顔をした少年だった。歳は秋人よりもいくつか下だと、外見だけを見ればそう判断してしまうような若い男。

「妨害が入るなんて予想外だった」

哀しそうに言い始め、言葉尻は反対にひどく嬉しそうだった。

「後はあなただけよ」

そう香名が告げると、彼、オーシニは、くすりと笑った。

「そうみたいだ。信じられないよ、君一人に皆やられちゃうなんて」
「一気に来ないからよ。この時間に転移してきた順番に、着いたそばから動くから」

「すごいな、そんなことまで分かってるんだ」

「大体は知ってるわ。私もある意味あなたたちと同類だから」

何度もあなたたちには出会った、と付け加える。その言葉で、オーシニは理解したらしかった。目の前の少女も、自分達と同じく一つの時間軸を逸脱する人間だということを。

「前の僕らからはどこまで聞いたの？」

面白そうに投げかけてくる。香名は内心で驚いていた。こんな風に会話するのは、三十回の接触のうちでも——その内オーシニにまで辿り着いたのは数回だけだが——初めてだったのだ。

「あなたたちが自分の時間軸を越えて生存のニッチを広げる侵略者だってこと、元もとの人類の時間軸上で未来に位置する場所から来たこと、それに——こういう襲撃を行うっていうこと」

「理由は分かる？」

秋人や、そのほかの個人を散発的に狙う理由。深海も不明だと言っていた理由……。

「いいえ」

「簡単だよ」

オーシニは指でこつこつと自分の頭を示して見せた。

「僕らは、時間移動に人の生理的な認知能力を応用してるんだ」
君も同じでしょ？ という笑み。

「人の生理認知は、一つの宇宙、膜宇宙に限定されない。あらゆる粒子が膜にくっついて他の膜を認識できない中で、重力視と、非物理的認知——『人の認知』は絡み合って別の膜宇宙に達する」

「つまりそれが——」

「他の時間軸の検索。だけど、問題があるんだ」

困ったような顔——わざとらしいほどに整ったそれらしい表情を作る。いけ好かない子供の代表のような雰囲気の発散に、香名が顔をしかめる。

「『自分から何かを探す』っていうのは、ものすごくアクティブな探査手段なんだよ。リーダーだって、電波を自分から発して相手にぶつかって跳ね返ったものを感知するでしょう？　だから赤外線探査とかで無い限り、探査っていうのは行った瞬間相手にも気取られる」

「……ミサイルか何かのロックオンみたいね」

「全く同じだよ。僕らの生理的時間検索も。僕は秋を強く感じることによって他の時間軸を探し出せるけど、同時に探していることもばれる。僕の強い認知が、認知される側やその他大勢に丸見えになる」

ぱん、と手を打つ。

「僕らは逃げてきたんだ。元的时间軸では、他の時間軸侵略は禁止手だった。でも僕らは反対した。だってそれは、素晴らしい可能性の幕開けだから。だから時間移動を強行した。今頃僕らは元的时间軸の人にとって最悪の犯罪者になってる」

だから、この時間軸に辿り着いた後は隠れていなければならない。香名の先読みと、彼の声が重なった。

「ひっそりと。間違ってもまた時間軸の検索なんてやったら『どこ』時間にいるか分かっちゃう」

「……………」

「だから。僕らのほかに、意図的であれ無意識的であれ、『他の時間軸まで、度を越えて強く季節や、何かの記号を感じる』人達は、居て欲しくない」

がつん、という衝撃が頭蓋の内側で鳴った。

『強く季節や』——人より異常に強く秋に感応する人物。秋に脅迫的に感じ入ってしまうことに悩んでいた人物。

朝倉秋人。

「かくれんぼしてる時に近くで大声出されるのは勘弁だから。だから、そういう人は見つけるなり片っ端から処理する。この下にいる、彼とかね」

呼び動作なしで秋刀魚が放たれていた。だがほとんど移動せずに、消し飛ぶ。

ルカーのワイヤーが、その先端に小さなブレードをつけられ、宙を漂っていた。

オーシニは笑った。今度は上品な少年の笑い方ではなかった。時空侵略者の、馬鹿げた笑み。

香名は自分の中に滾るものを感じていた。

（これで終わりにしてやる）

ぶん殴って、斬りとぼして、組み伏せて、叩き割って、燃やして潰して千切ってポイ、だ。

こいつらは、自分達を生み出した技術の原点、整理認知の可能性を開花させる起点となった人間を殺したのだ。秋人はそのせいで殺され続けたのだ。

すべての時間軸で秋人が最初に狙われた理由——見つかりやすかったから？

だとすれば、それは何のせいかな。簡単だった。彼の持つ、認知能力が桁外れに強いから。

人類の時間移動の可能性の原点。それが彼だったかもしれないのだ。

香名は、自分にも埋め込まれている時間移動装置を感じた。

ルカーを最大限解放した。無数のワイヤーが、ブレードが、弾丸が形成された。その全てを意識した。ハルが警告の叫びを上げていた。私が危ない、意識が死んでしまう。

黙れ^{shut up}

輝きをまもって、彼女は飛んだ。

猛烈な火線がオーシニから放たれ、それを受け流す為に作った不

可視のシールドが歪んだ。そこに立て続けに花が突き刺さり破裂し、飛び散った破片から昆虫が飛び出して襲い掛かってくる。

無数の昆虫の群れに対して、香名はそこら中に散らしたルカーを昆虫の数と同じだけの小さな刃に変えた。すべての昆虫が貫かれる。

今度は近づいて、秋刀魚が振るわれる。花卉を纏った秋刀魚。ブレードで受けると、刃が弾かれる際に花卉が向かって飛んでくる。

香名は一瞬でミキサーに放り込まれたような状況に陥りながら、強固なワイヤーを無数に作った。花卉のミキサーがすべての方向から襲い掛かり、飲み込む。

身体中に巻きつけたワイヤーで切り抜け、花卉から脱出すると、狙い済ましたかのように秋刀魚が飛来した。脇腹に一匹が、もう一匹が右肩に突き刺さる。

無視して、突っ込む。

オーシニが軽く驚いたような顔になって、両手で秋刀魚を構えた。交代しつつ、雨霰と彼岸花を撃ち込んでくる。

圧倒的な力だった。香名は限界を超えてルカーを操っていたが、追いつかない。手数もその多彩さも、オーシニは彼以外の四人とは比較にならない。

恐れ。慄き。歯の根が震えそうになる。未だに耐えない戦い。

香名はきつと視線に力をこめた。ふざけるな、ちくしょう――

出来る限りの速さで相手に向かって突き進む。どんどん飛んでくる敵の攻撃。加速的に蓄積するダメージ。右足、左足、右胸、右足、右腕、右胸……延々と続くかのように思われる。

右手を突き出す。そこに、吸い込まれるように秋刀魚と熱線と花と虫が飛びつく。

炸裂。

肩から丸ごと、右腕が無くなる。ばらばらになって消える。かつて無い損傷。それを受けて、彼女は笑った。にい、と口の端をあげる。

(くらえ――)

一気に、それまで制御していた量の二倍ものルカーが放たれた。

敵が今度こそ決定的に驚愕する。

失った左手の感覚質を使って操作するルカー。それに加わる、右手の感覚。

朝日が昇る寸前——青く染まった景色の中に、銀色の光が爆裂した。

無数の腕が、無数の刃を振るい、無数のワイヤーを伸ばしていく。絡め捉え斬り断ち殴りつける。抵抗を許さず、ありったけの力を使う。反撃は意に介さなかった。敵が死にゆく中で、香名もまた傷を負っていく。

人は皆、いつか死ぬ

呆れるほどに受け入れて、彼女は勝利した。

＊

薄れていく——何もかも。

落ちながら、彼女は口を開いた。

多分聞こえないと思うけど、言っておきたい言葉。

好き——ぱちん・プロテクトによる言動ロックの鍵の音。

愛してる——ぱちん

私とあなたは、昔、別の時間で——ぱちん

好きだと言ってくれた、勿論、私も——ぱちん

本当の名前——ぱちん

私のどこからどこまでが人工物か——ぱちん

どれだけの間、あなたに会い続け、見捨て続けたか——ぱちん
それがどれだけ苦しかったか——ぱちん
それでも合えることがどれだけ嬉しかったか——ぱちん
初めて出会ったときのこと——ぱちん

そして最後に

愛してるわ（ぱちん）

「ばいばい」

増水した川が飲み込み、どこかに消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3510o/>

秋へ、秋へ、秋へ……

2010年11月6日17時10分発行